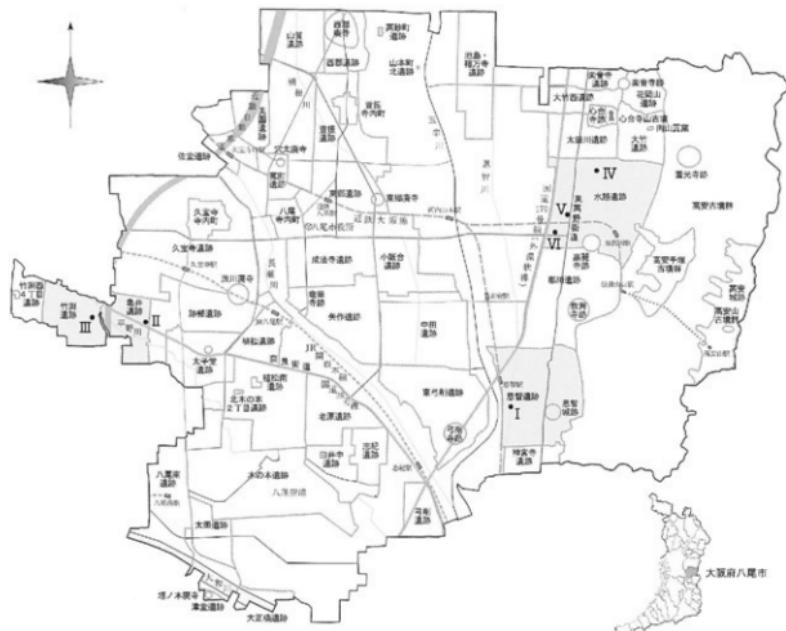


- I 恩智遺跡(第24・29次調査)
- II 亀井遺跡(第19次調査)
- III 竹渕遺跡(第11次調査)
- IV 水越遺跡(第19次調査)
- V 水越遺跡(第22次調査)
- VI 水越遺跡(第23次調査)

2016年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

- I 恩智遺跡(第24・29次調査)
- II 亀井遺跡(第19次調査)
- III 竹渕遺跡(第11次調査)
- IV 水越遺跡(第19次調査)
- V 水越遺跡(第22次調査)
- VI 水越遺跡(第23次調査)



2016年

公益財團法人八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は、大阪府の中央部東に位置し、西は上町台地、東は生駒山地、南は羽曳野丘陵に囲まれた山麓・丘陵先端から平野部にかけて立地しています。山麓や丘陵先端部には、古くは旧石器時代に遡り得る人々の生活の痕跡が点在しています。また、平野部では古大和川水系の河川が運び続ける土砂が厚く堆積しており、その中に弥生時代以降の生活の跡が連続と積み重なっています。

このような先人達の残した財産－埋蔵文化財－は、市民が共有すべき財産であるといつても過言ではありません。しかし、市民生活の利便性や豊かさを追求するための開発工事は、一方ではこのような共有財産を破壊することが前提となってしまいます。そこで私どもは、開発工事によって破壊される埋蔵文化財について事前に発掘調査を行い、記録保存・研究に努めているところであります。

本書は、公共事業に伴う発掘調査の報告をまとめたもので、平成23・24・27年度に行なった4遺跡6件の調査成果が収録されています。いずれも小規模な調査ではありますが、弥生時代前期末以降、近世に至るまでの遺構や遺物が検出されております。特に恩智遺跡では、弥生時代中期後半の土坑から遺存状態の良好な土器がみつかり、当該期の土器を研究する上で貴重な資料を得ました。本書が地域史、ひいては日本史解明の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、多くの関係諸機関および地元の皆様方に、多大な御協力をいただきましたことを心から厚く御礼申し上げます。

平成28年3月

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

理事長 平野佐織

序

1. 本書は、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が平成23・24・27年度に実施した公共事業に伴う発掘調査の成果報告を収録したものである。
1. 本書で報告する発掘調査業務は、八尾市教育委員会と八尾市、及び当調査研究会の三者により締結した協定に基づくもので、八尾市教育委員会からの埋蔵文化財発掘調査指示書により当調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 本書作成の業務は、各現地調査終了後に着手し、平成28年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、目次のとおりである。
1. 本書の執筆は各調査担当者が行い、全体の構成・編集は西村公助が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1地形図(平成8年7月発行)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成27年度版)をもとに作成した。
1. 本書で用いた標高の基準は東京湾標準潮位(T.P.)である。
1. 本書で用いた方位は座標北(国土座標第VI系〔日本測地系〕)を示している。
1. 遺物実測図の断面表示は、須恵器が黒、その他を白とした。
1. 土色については、一部の調査を除き『新版標準土色帖』1997年後期版 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目 次

はしがき

序

I	恩智遺跡第24・29次調査(O J 2011-24・O J 2012-29).....	1
II	亀井遺跡第19次調査(KM2015-19).....	37
III	竹渕遺跡第11次調査(T K 2015-11).....	45
IV	水越遺跡第19次調査((MK2015-19).....	51
V	水越遺跡第22次調査((MK2015-22).....	63
VI	水越遺跡第23次調査((MK2015-23).....	69
	報告書抄録	

I 恩智遺跡第24・29次調査(O J 2011-24・O J 2012-29)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市恩智中町三丁目地内で実施した、恩智中町三丁目地内雨水流出抑制施設整備工事に伴う発掘調査報告書である。なお調査は平成23・24年度にまたがったため、平成24年度は業務名を恩智中町三丁目地内雨水流出抑制施設整備工事(その2)として実施した。
1. 本書で報告する恩智遺跡第24次調査(OJ 2011-24)、第29次調査(OJ 2012-29)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会(第24次調査時は財団法人八尾市文化財調査研究会)の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
 1. 調査は当調査研究会 坪田真一・西村公助・原田昌則が担当した。
 1. 調査期間・面積は、第24次調査が平成24年2月13日～2月25日(実働3日)・約16.5m²、第29次調査が平成24年12月13日～平成25年1月30日(実働9日)・約92.0m²である。
 1. 現地調査参加者は第24次調査が飯塚直世・芝崎和美・竹田貴子、第29次調査が芝崎・竹田・田島宣子・徳谷尚子・山内千恵子である。
 1. 内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成28年3月31日をもって終了した。
第24次調査 遺物実測・トレース-山内。
第29次調査 遺物実測-飯塚・市森千恵子・伊藤静江・國津玲子・芝崎・永井律子・村井俊子・村田知子。遺物トレース-市森。
 1. 本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

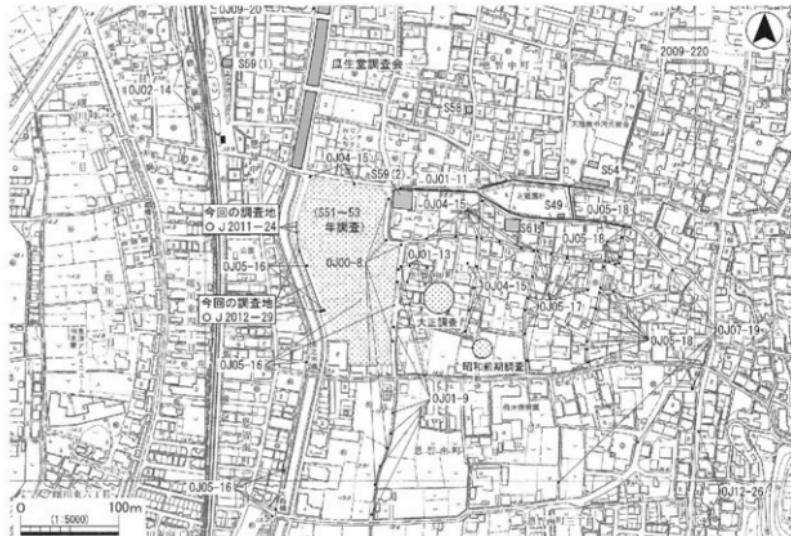
1.はじめに.....	1
2. 第24次調査.....	2
1) 調査の方法と経過.....	2
2) 基本層序.....	2
3) 検出遺構と出土遺物.....	2
3. 第29次調査.....	11
1) 調査の方法と経過.....	11
2) 基本層序.....	11
3) 検出遺構と出土遺物.....	11
4.まとめ.....	22

I 恩智遺跡第24・29次調査(O J 2011-24・O J 2012-29)

1. はじめに

恩智遺跡は、八尾市南東部に位置する旧石器時代～鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、恩智北町一～四丁目、恩智中町一～五丁目、恩智南町一～五丁目にあたり、南北約1.0km、東西約1.2kmがその範囲とされる。地理的には生駒山地西麓に形成された扇状地から低地部にかけて広がっており、周辺では、北側に都川遺跡、南側に神宮寺遺跡、西側に玉串川を挟んで東弓削遺跡が存在する。本遺跡については、古くは大正6(1917)年の梅原末治・島田貞彦両氏による踏査と鳥居龍藏氏による試掘調査、昭和14(1939)年の大阪府の事業に伴う藤岡謙二郎氏の発掘調査、昭和23(1948)年の今里幾次氏による出土遺物の報告等がある。そして昭和50～53(1975～1978)年には恩智川改修工事に伴う大規模な調査が瓜生堂遺跡調査会により実施された。これらの調査により当遺跡は縄文時代～弥生時代を中心とした遺跡として認識されている。近年も天王の杜周辺とその南～南西側、北側を中心に多くの発掘調査が行われ、本遺跡は天王の杜周辺から北西～西側を中心に展開していたことが判明している。

今回の調査地は遺跡範囲の中央西部にあたる。周辺では北部での前述の恩智川改修工事に伴う調査、昭和51～53(1976～1978)年には東側マンション部分での八尾市教育委員会による調査(未報告)が行われている他、当研究会が公共下水道工事に伴う第15・16次調査を実施しており、これらの調査では弥生時代中期～後期を中心とした遺構・遺物が多く検出されている。



2. 第24次調査(O J 2011-24)

1) 調査の方法と経過

調査区は北流する恩智川の右岸道路上で、南北方向に連なる人孔部分2箇所、管路部分1箇所の計3箇所(北から1~3区)である。調査は3区・1区・2区の順に実施した。

調査にあたっては、まず現地表(約T.P.+12.4m)下約1.4mまでを機械掘削し、以下の工事掘削深度である現地表下2.0~2.5mまでについて、人力・機械掘削併用により実施した。

調査では調査地北部に位置する八尾市街区多角点(10E38 : T.P.+12.893m)を標高の基準とした。

遺構名は、遺構略号+面+地区+番号とした(例、SD 123 : 第1面、2区、3番目の溝)。

2) 基本層序

0層は盛土、搅乱。1~3層はFe斑を多く含む層相で作土の可能性が高い。4層は全域で見られた土壤化層である。3区では上面で土坑を検出した(第1面)。5層は2区南部で見られ、水成層と考えられる。6・7層は2区で見られた土壤化層で、弥生時代中期の遺物を多く含む。8・9層は3区で見られ、汚れた土壤化層である。3区10・11層は水成層と考えられるが、やや汚れており土壤化している可能性がある。11層からは弥生時代中期の土器が少量出土した。2区6層上面、3区8層上面が第2面である。12~14層は水成層と考えられる。2区では上面が第3面である。

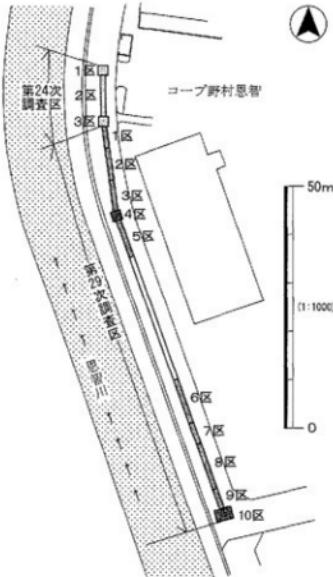
3) 検出遺構と出土遺物

〈第1面(約T.P.+10.9m)〉

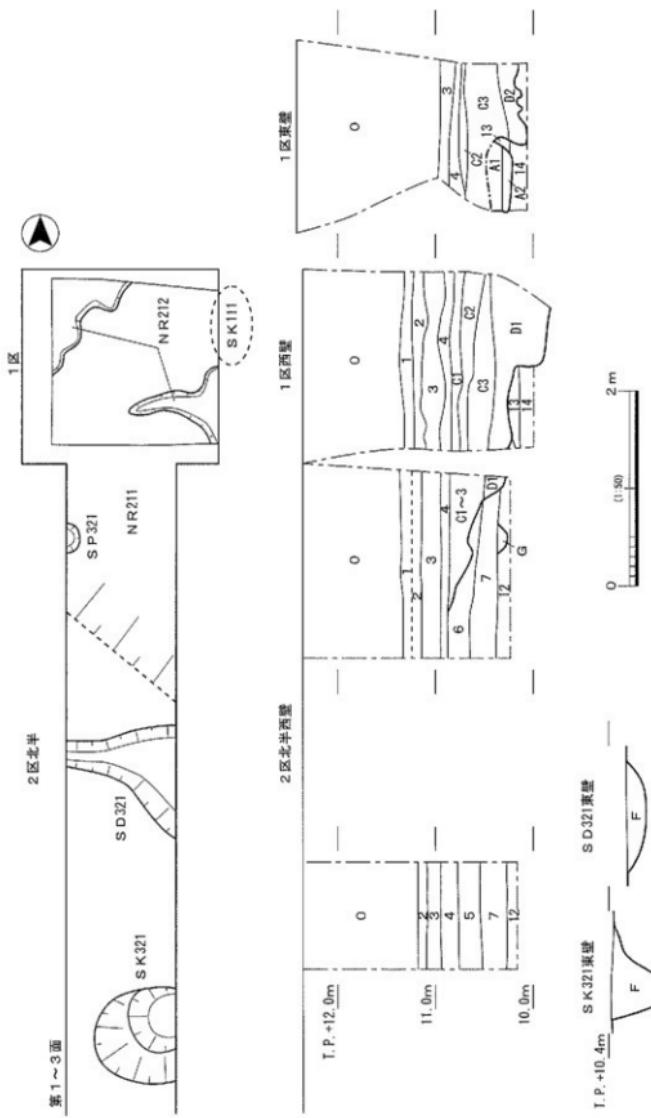
3区4層上面で土坑1基(SK 132)を検出した。また1区では東壁内で土坑と考えられる遺構(SK 111)を検出した。

SK 111

1区東壁内の抉れた部分で検出したもので、詳細は不明である。おそらく調査区東側に隣接するオーバーハング気味の掘方を呈する遺構の底部付近に当たると考えられる。検出部分の幅約70cmを測り、T.P.+10.5~10.2mの範囲で、ブロック状の2層の埋土を確認した。遺物は平安時代後期頃までの土器が出土しており、1~6を図化した。1・2は「て」の字口縁の土師器皿で、1は11世紀後半、2は12世紀前半に比定される。3は土師器皿、4は土師器台付き皿の高台部分である。5は両黒の黒色土器碗で10~11世紀代に比定される。6は弥生土器甕で、口縁端部に刻み目、

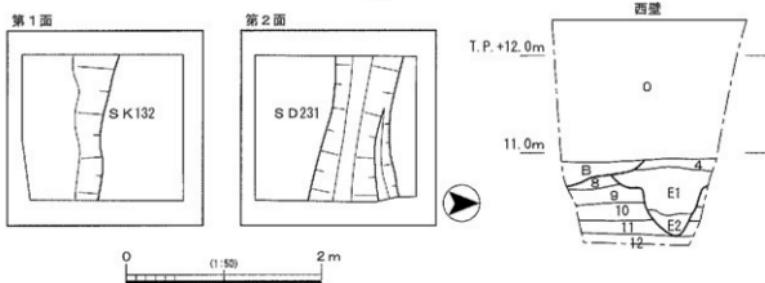


第2図 調査区位置図



第3図 1・2区平断面図

3区



第4図 3区平断面図

1～3区層名

0. 盛土・擾乱
1. 10YR6/2灰黃褐色細粒砂混シルト質粘土 Fe斑 搪拌作土
2. 10YR6/2灰黃褐色細粒砂多混シルト質粘土 Fe斑 搪拌作土
3. 2.5Y5/2暗灰黃色シルト～細粒砂 Fe斑 作土？
4. 2.5Y3/1黒褐色細粒砂多混シルト質粘土 土壌化層
5. 2.5G5/1オリーブ灰色シルト質粘土～粗粒砂
6. 10YR3/1黒褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト 土壌化層
7. 2.5Y3/1黒褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト 土壌化層
8. 2.5Y5/3にぶい黄褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土 土壌化層
9. 2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂～粗粒砂少混シルト質粘土 土壌化層
10. 5Y6/2灰オリーブ色細粒砂～粗粒砂少混粘土 Fe斑 水成層？
11. 10YR5/3にぶい黄褐色粘土 Fe斑多 水成層？
12. 2.5G15/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土 水成層？
13. 7.5G13/1暗緑灰色シルト混細粒砂～中粒砂 土壌化層
14. 5G12/1オリーブ黑色シルト混細粒砂～粗粒砂 土壌化層？

SK111

- A1. 2.5Y3/1黒褐色シルトブロック混シルト質粘土 ブロック状
A2. 10YR2/1黒褐色細粒砂混シルト質粘土 ブロック状

SK132

- B. 10YR4/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土 ブロック状

NR211

- C1. 2.5Y7/2灰黄色シルト質粘土ブロック混粗粒砂
C2. 2.5Y7/1灰白色細粒砂
C3. 5Y6/1灰色シルト～極細粒砂互層

NR212

- D1. 10YR6/3にぶい黄褐色巨礫混細粒砂～極粗粒砂
D2. 10Y5/1灰色シルト質粘土ブロック混粗粒砂

SD231

- E1. 2.5Y3/1黒褐色細粒砂多混粘土質シルト 炭 ブロック状
E2. 5Y3/1オリーブ黒色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土 炭 ブロック状

SK321・SD321

- F. 10YR2/1黒色細粒砂混シルト質粘土 炭 ブロック状

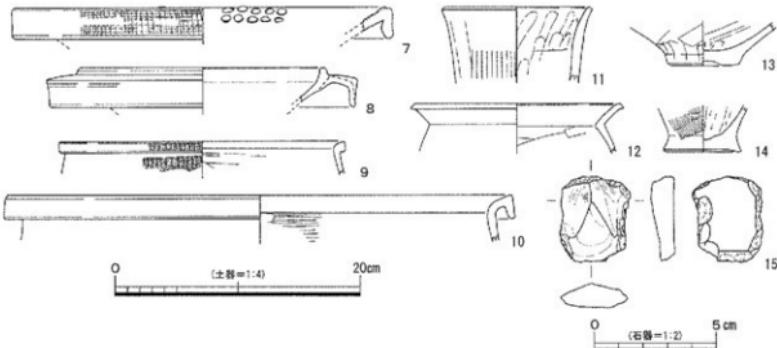
SP321

- G. 10YR3/3暗褐色細粒砂混シルト質粘土 炭 ブロック状

口縁部直下外面に5条のヘラ描沈線文を施すもので、弥生時代前期新相に比定される。混入品である。

SK 132

3区盛土直下の検出であり、本来の構築面は不明である。東西方向のやや蛇行する肩から南に緩やかに落ち込むもので、深さ最大約25cmを測る。埋土はブロック状の單一層である。遺物は弥生時代中期～後期初頭の土器、石器が出土しており、7～15を図化した。7は広口壺である。垂下させた口縁部外端面に簾状文を巡らせ、口縁部内面に5個2段を一組とした円形浮文を施す。8は水平口縁の高杯口縁部である。外面が赤色を呈し、朱塗りされている可能性がある。9は口縁部、体部外面に簾状文を施す鉢である。外面に黒斑を有する。10は大形の壺、あるいは鉢の口縁部で、体部内面は横位ヘラミガキを施す。11は長頸壺口縁部で、調整は外面継位ヘラミガキ、内面は指頭圧痕や粘土接合痕が明瞭である。12は壺で、調整は口縁部ヨコナデ、体部ナデである。13は壺底部と考えられる。14は壺底部で、調整は体部外面、底部外面にハケを施す。これらの土器は、7～10・14が畿内第Ⅳ様式、11～13が第V様式に比定される。15はサヌカイト剥片である。上辺の自然面を除く縁辺に調整剥離が認められ、何かの石器の未成品の可能性がある。



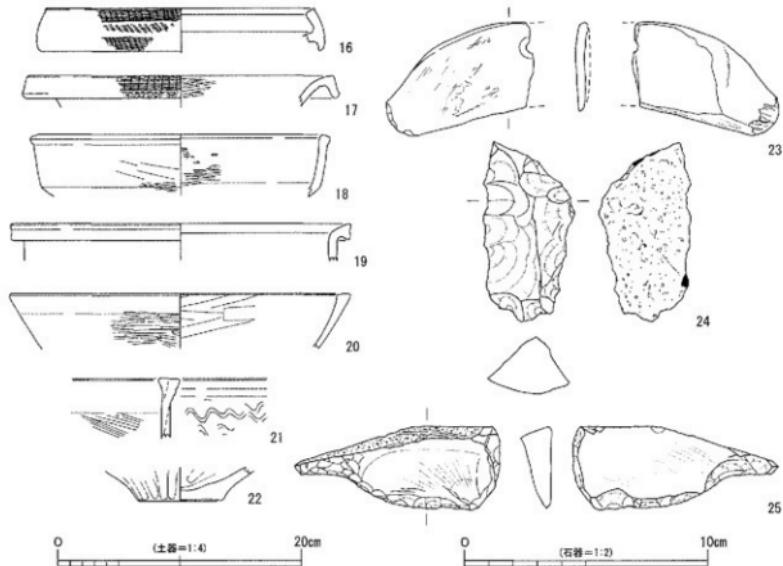
第6図 SK 132出土遺物

<第2面(約T.P.+10.8m)>

3区8層上面で溝1条(S D231)、1～2区6層上面で自然河川(N R211・212)を検出した。

S D231

東西方向に直線的に延びる溝で、規模は幅60～90cm・深さ約70cmを測る。断面形状はV字形に近く、埋土はブロック状の2層からなる。遺物は弥生時代中期後半の土器、石器(石庖丁・サヌカイト製削器・他)が出土しており、16～25を図化した。16は付加状口縁の広口壺で、口縁部外面に上から簾状文・刺突文・簾状文を施す。17は広口壺で、垂下させた口縁部外面に簾状文を、



第7図 SD 231出土遺物

また端部に刻み目を施す。18は口縁部を方形に肥厚させる鉢で、内面調整は横位ヘラミガキである。19は鉢、あるいは甕の口縁部である。20は高杯と考えられる。21は大形の鉢で、体部外面に櫛描波状文を巡らせ、体部内面はハケ調整である。非生駒西麓産である。22は壺、あるいは鉢の底部で、外面に黒斑を有する。23は内湾刃形態の石庖丁で、刃は片刃である。石材は緑泥片岩。24はサヌカイト石核で、断面三角形を成し、右面は自然面である。25はサヌカイト削器である。両面に主要剥離面を残し、上辺は自然面で、下辺には両面からの調整剥離により刃を形成している。石錐としての使用も考えられる。

N R211・212

N R211は平面的には捉えていないが、2区北部に北西-南東方向の肩を有し、1区全域を含んでさらに北に広がる河川である。検出部分で深さ50cmを測る。埋土は緩やかな水流を示すシルト～極細粒砂からなる。底部で検出したN R212は、1区北西角で北東-南西方向の肩が、また南東部では東に落ち込む状況が見られた。深さ最大60cmを測り、埋土は極細粒砂～極粗粒砂で、シルト質粘土ブロックや巨礫を含む他、底部のベース層を抉る状況が認められることから、相当の急流が想定できる。遺物は弥生土器片が1点出土したのみである。

〈第3面(約T.P.+10.4m)〉

2区12層上面で土坑1基(S K321)、溝1条(S D321)、ピット1個(S P321)を検出した。

S K 321

平面橢円形を呈すると考えられ、規模は東西0.8m以上・南北1.0mを測る。断面逆台形で、中心から北寄りに底面を有し、深さ約55cmを測る。埋土はブロック状の單一層である。弥生時代中期後半の土器、石器が出土しており、26~31を図化した。26~28は甕で、いずれも底体部外面に縦位ヘラミガキを施すものである。26は体部外面最上位、27・28は底体部外面・体部下位内面が焼ける。26は口径約14.8cmを測る。29・30は壺底部と考えられる。31は土器片製の円板である。内面に横位ヘラミガキを施すもので壺体部と考えられ、縁辺は一部を陰いでやや平滑に磨かれている。直径約5.3cmを測る。

S D 321

東西方向の溝で、規模は幅0.3~1.1m・深さ約20cmを測り、幅は西に向って減じている。断面皿状で、埋土はS K 321と同じである。遺物は弥生時代中期後半の土器、石器が出土しており、32~36を図化した。32は口縁部を方形に肥厚させる台付鉢と考えられ、外面には口縁部、及び体部には二段に簾状文を施す。33は口縁部を小さく外反させるもので、無頸壺と考えられるが明確ではない。34は壺底部で、外面に黒斑を有する。35はほぼ完形の石庖丁である。刃部はやや外湾し、刃は両刃である。法量は長辺16.1cm・短辺6.5cm・厚さ0.9cmを測る。2個の紐孔は両面から穿たれ、径約5mm・孔間約15mmを測る。石材は緑泥片岩である。36はサヌカイト削器である。左面に自然面、右面に主要剥離面を大きく残し、下辺には主に右面に調整剥離を施し刃を形成する。

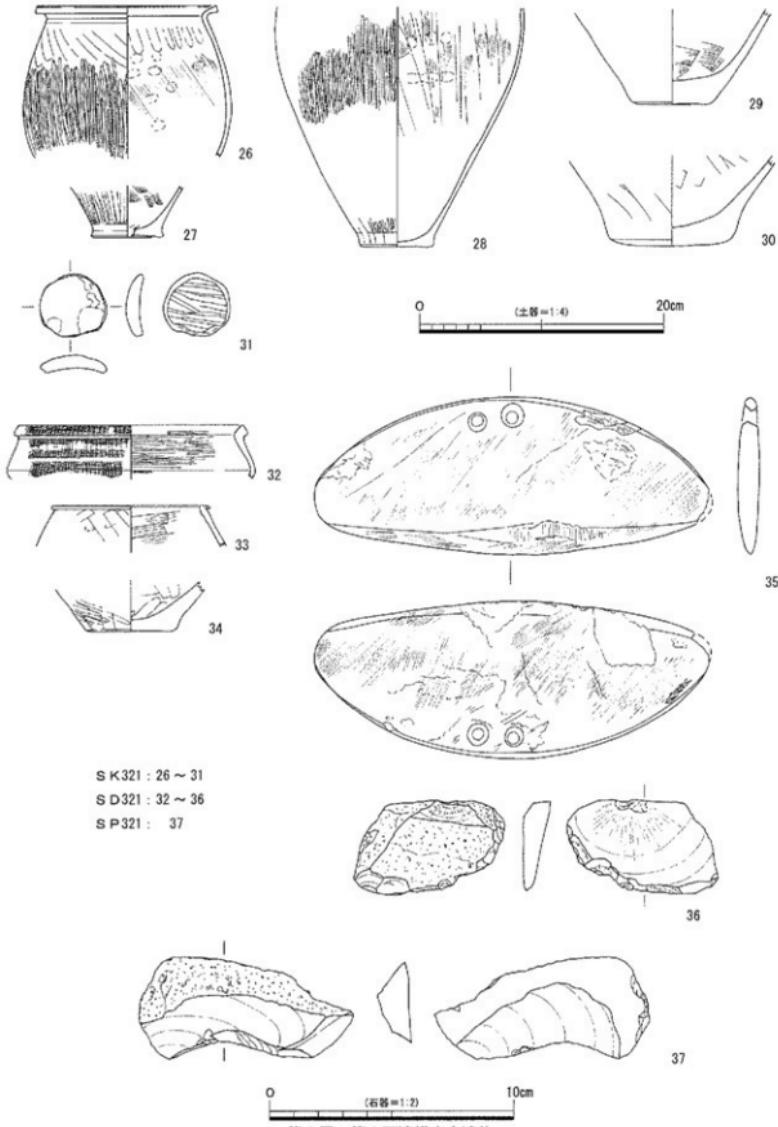
S P 321

平面円形を呈すると考えられ、規模は東西15cm以上・南北30cmを測る。断面逆台形で、深さ約55cmを測り、埋土はブロック状の單一層である。遺物はサヌカイト剥片が1点(37)出土した。左面に自然面、右面に主要剥離面を大きく残し、調整剥離は認められない。

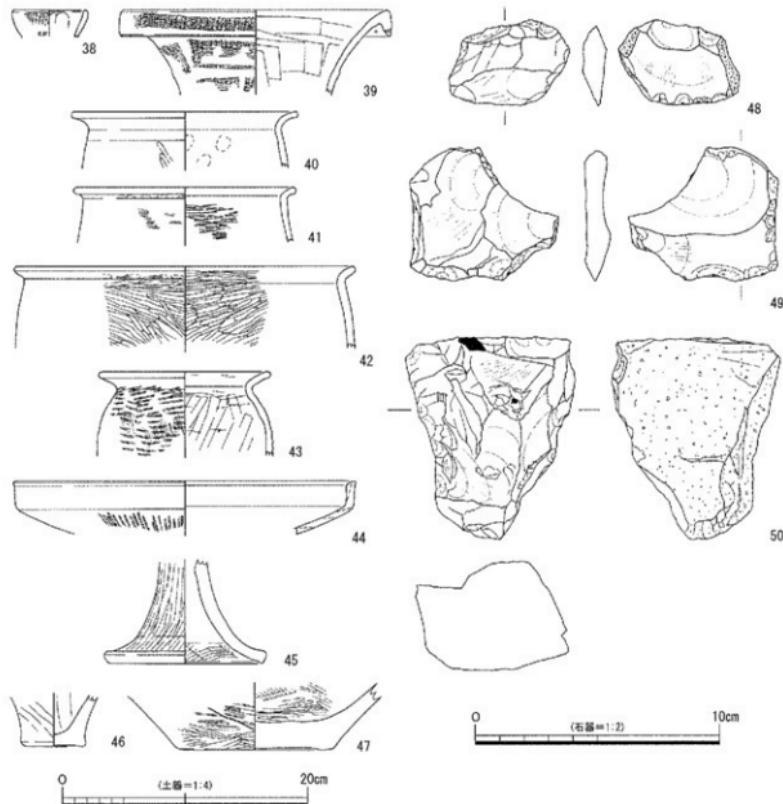
〈包含層出土遺物〉

2区出土の38~50、3区出土の51~59を図化した。

2区-38は小形の細頸壺と考えられる。口縁部外面に二段以上に簾状文を巡らせる。39は広口壺で、垂下させた口縁部外端面に1条の簾状文、及び刺突文、頸部外面に二段以上の簾状文を巡らせる。内面調整は板ナデである。40~43は甕である。40~42はヘラミガキ調整である。43は外面の平行タキが口縁部下位に及び、内面は縦位のヘラケズリである。44は高杯口縁部-体部で、口縁部外面に黒斑を有する。45は高杯脚部で、脚端部を下方に肥厚させる。調整は外面ヘラミガキで、裾部内外面には先行する粗いハケが認められ、裾部がやや焼ける。非生駒西麓産である。46は甕、46は壺あるいは鉢の底部と考えられる。46は底部外面の一部に黒斑を有する。47は内外面、及び底部外面もヘラミガキ調整を施す。これらの土器は43・44が畿内第V様式、他が概ね第IV様式に比定され、40~42は第II・III様式に遇る可能性もある。48はサヌカイト製削器である。主要剥離面側下辺に片面からの調整剥離により刃を形成している。49はサヌカイト剥片で、一辺に自然面を残す。50はサヌカイト石核である。右面に大きく自然面を残し、他の面には細かい剥離が多く認められる。頂部や角部に潰れていると考えられる部分が見られることから、叩き石等に使用した可能性もある。

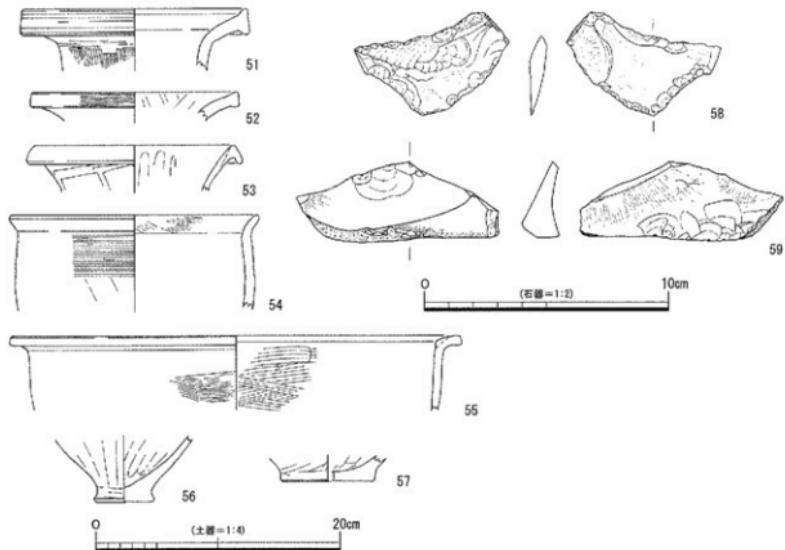


第8図 第3面遺構出土遺物



第9図 2区包含層出土遺物

3区-51は広口壺で、直立気味の頸部から口縁部が外反し、端部は上下に肥厚する。調整は頸部外面タテハケで、口縁部外端面には櫛描直線文を巡らせる。口縁部内面に黒斑を有する。52は広口壺で、51と同じく口縁部外端面には櫛描直線文を巡らせる。53は口縁端部を垂下させる広口壺である。54・55は甕で、54は口縁部直下外面に9条の櫛描沈線文を巡らせる。55は外面に黒斑を有する。56は甕、57は壺あるいは鉢の底部と考えられる。57は体部外面、及び底部外面にもヘラミガキ調整を施す。これらの土器は51が畿内第V様式、54が第I様式、他が概ね第IV様式に比定され、55は第II様式に遡る可能性もある。58はサヌカイト製削器である。小さく残る自然面以外の各辺に、両面からの調整剥離により刃を形成している。59はサヌカイト剥片である。一辺に自然面を残し、調整剥離は認められない。



第10図 3区包含層出土遺物

3. 第29次調査(O J 2012-29)

1) 調査の方法と経過

調査地は第24次調査(O J 2011-24)の南側延長部分にあたり、調査対象は人孔部分1箇所(2.0×2.0m)、管路部分2箇所(1.0×80.0m)、分水桿部分1箇所(3.6×2.0m)の計4箇所(約92m²)で、北から管路部分、人孔部分、管路部分、分水桿部分となる。地区名は北から1~10区とした。

調査は工事の進捗状況に合わせて4区(人孔)、1~3・5区(管路)、10区(分水桿)、6~9区(管路)の順に実施した。なお、管路部分5・6区間の約27mについては調査対象範囲が全て搅乱されていた他、10区南部・東端部も既設構造物により搅乱されていた。

調査にあたっては、まず現地表(約T.P.+12.4~12.7m)下約1.4mまでを機械掘削し、以下の工事掘削深度である現地表下約2.0mまでについて、人力・機械掘削併用により実施した。

調査では調査地の位置する道路上に設置されている八尾市街区多角補助点(1A282:T.P.+12.455m)を標高の基準とした。

遺構名は、遺構略号+番号とし、北から順に付した。また地区名について、1~5区を北部調査区、6~10区を南部調査区と呼称する場合がある。

2) 基本層序

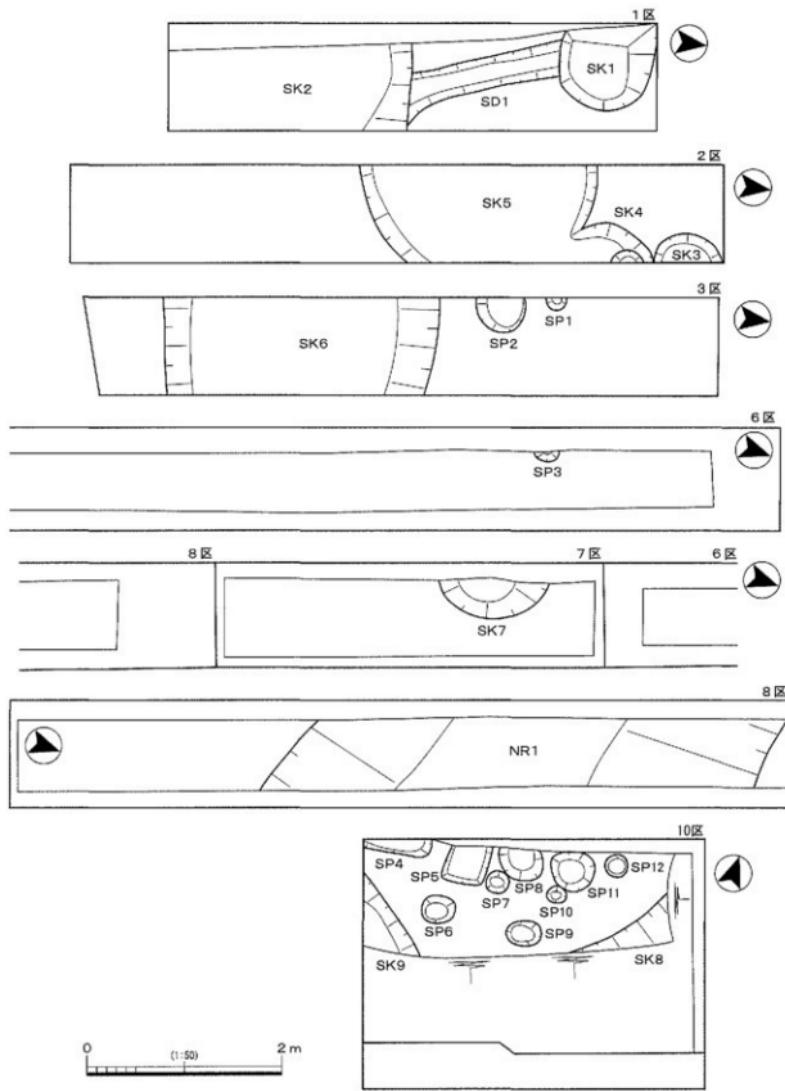
0層は盛土、搅乱。1層は6区でのみ確認した旧耕土である。2層は北部調査区で見られた搅拌された作土である。3層は4区で確認され、水成層の可能性がある。4層は北部調査区で見られ、作土の可能性があり、時期は中世頃と考えられる。5層は南部調査区で見られ、整地層の可能性がある。6~9層は北部調査区で見られた弥生時代中期~後期の遺物包含層である。10層は3区南部で見られ、水成層の可能性がある。11・12層は南部調査区で見られた弥生時代の遺物包含層で、北部調査区の6~9層に対応する。13~16層は水成層で、13層や14層上部は土壤化している。なお4・5区西壁で見られたア~ウ層については、平面的には捉えていないが遺構埋土と考えられる。

3) 検出遺構と出土遺物

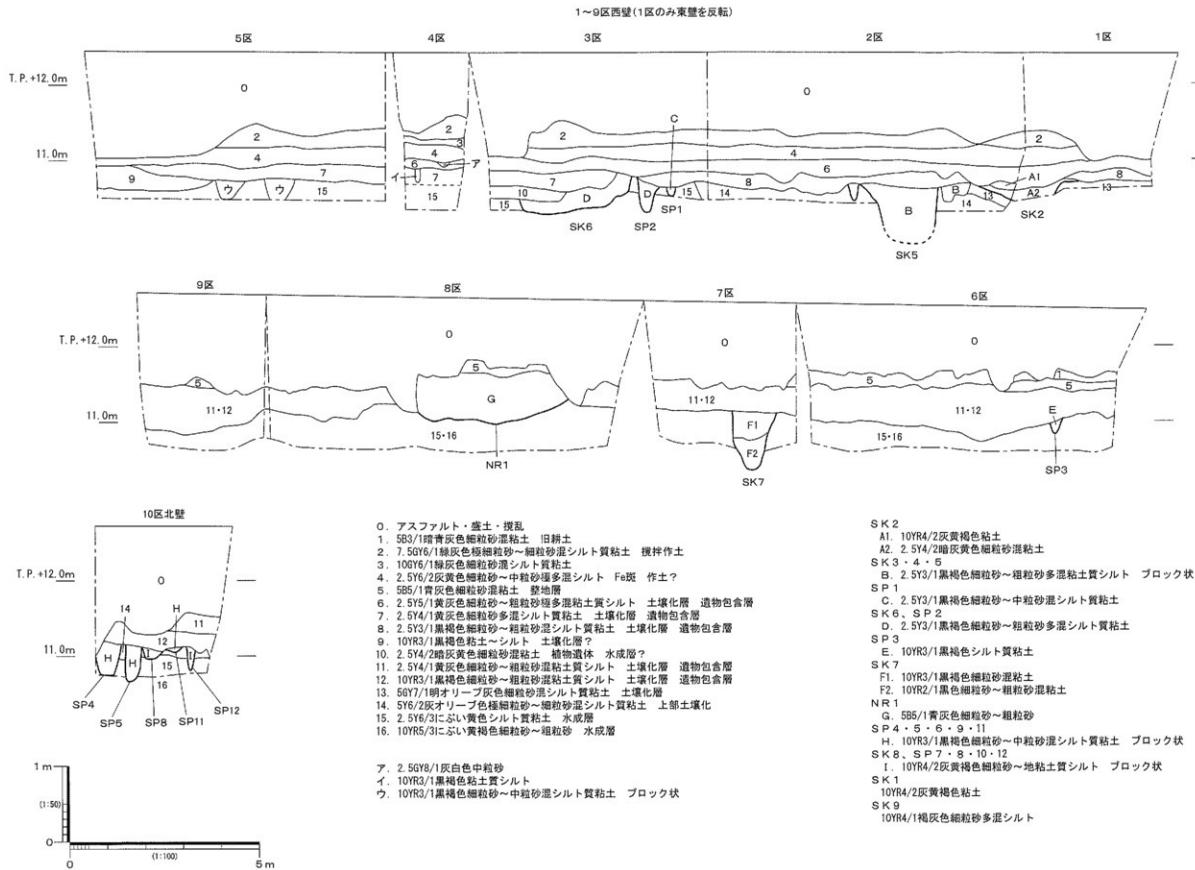
北部調査区では約T.P.+10.7m、南部調査区では約T.P.+11.1mで、弥生時代中期~後期の遺構を検出した。内訳は土坑9基(SK 1~9)、ピット12個(SP 1~12)、溝1条(SD 1)、自然河川1条(NR 1)である。また出土遺物量はコンテナ5箱である。

SK 1

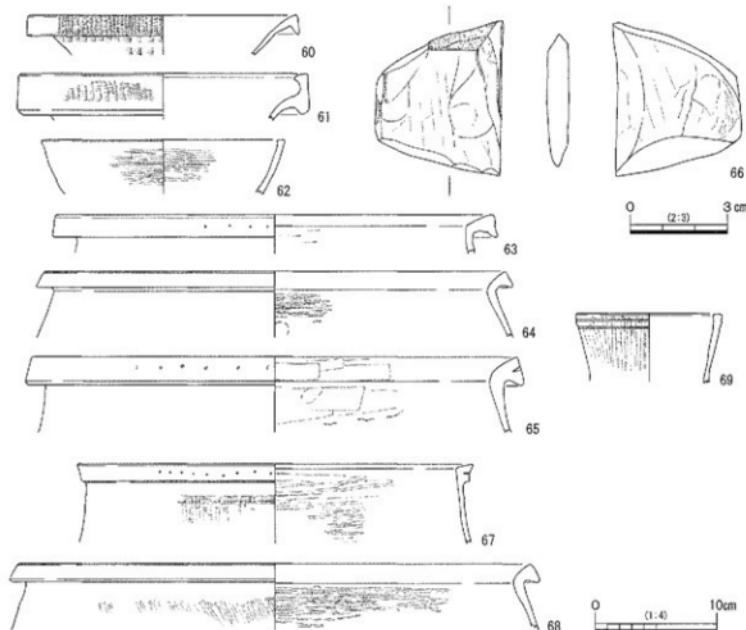
1区北部検出の土坑で、西は調査区外に及ぶ。検出部分の平面形は半円形に近く、規模は南北約1.0m・東西0.9m以上・深さ約15cmを測る。断面皿状を呈し、埋土はSK 2の上層と同じである。弥生時代中期後半の多くの土器や石器が出土しており、60~66を図化した。60は広口壺で、垂下させた口縁部外端面に一段、頸部外面に二段以上の簾状文を巡らせる。61は有段口縁の広口壺で、受け口状の口縁部外端面に一段の簾状文を巡らせる。62は鉢で、調整は内外面共に横位ヘラミガキを施す。63~65は壺の口縁部で、いずれも口縁端部を短く垂下させるものである。63・65は口縁部外端面に刺突文を巡らせる。66は石包丁の端部である。石材は緑泥片岩で、刃は片刃と思われる。



第11図 第29次調査平面図



第12図 第29次調査断面図



第13図 1区SK 1・2、SD 1出土遺物

SK 2

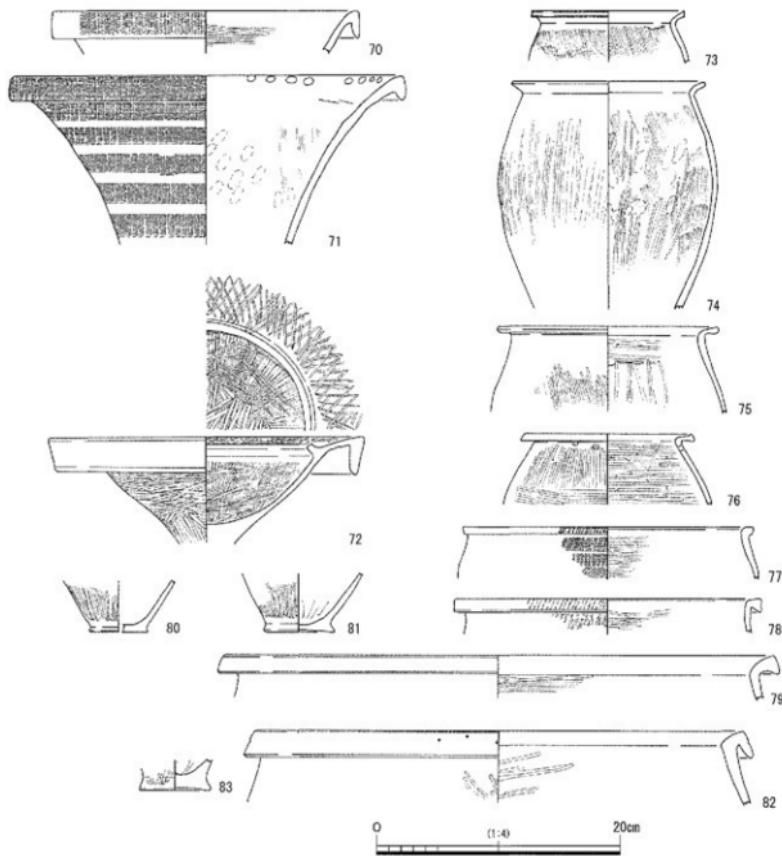
1～2区検出の土坑で、2区では西壁でのみ確認した。1区中央で検出した東西方区の肩から南に落ち込むもので、規模は東西1.0m以上・南北約2.5m・深さ最大約30cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の2層からなる。弥生時代中期後半の土器が出土しており、67・68を図化した。67は大形鉢で、方形に肥厚させた口縁端部外面に刺突文、体部外面に縦状文を巡らせる。調整は内面に横位ヘラミガキを施す。68は甕で、調整は外間に縦位、内間に横位のヘラミガキを施す。

SK 3

2区北部検出の土坑で、東は調査区外に及ぶ。検出部分の平面形は半円形に近く、規模は南北約0.7m・東西0.3m以上・深さ約60cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の単層である。遺物は出土していない。

SK 4

2区北部、SK 3の南側に隣接して検出した土坑で、東は調査区外に及ぶほか、南はSK 5に接続する。検出部分の平面形は半円形に近く、規模は南北約0.8m・東西0.4m以上・深さ約50cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の単層である。弥生時代中期後半の土器が多く出



第14図 2区SK4、3区SK6出土遺物

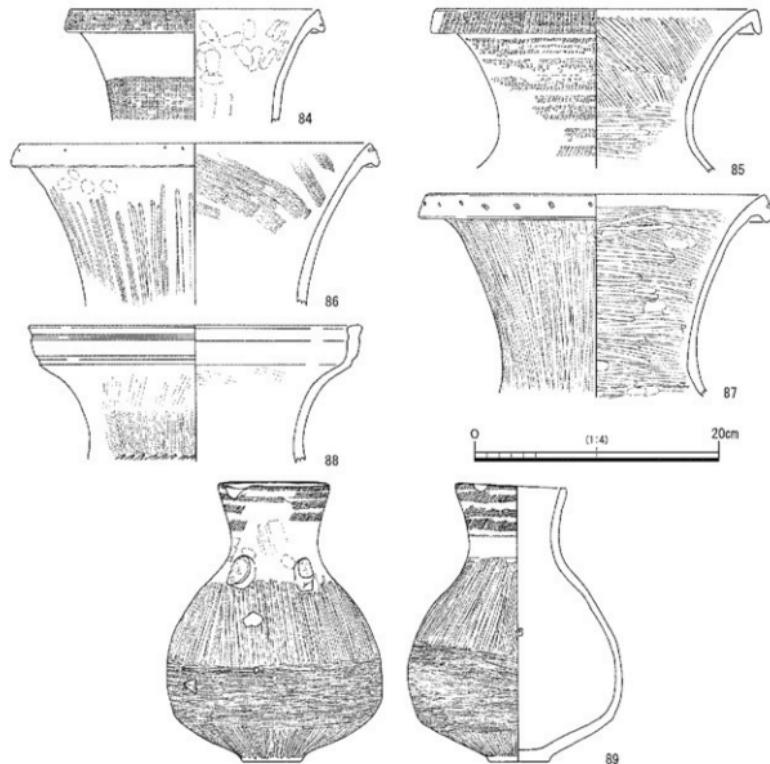
土しており、70～81を図化した。70・71は広口壺で、垂下させた口縁部外端面、頭部外面に篆状文を施す他、71は口縁端部内面に3～4個一組の円形浮文を9方向に貼り付ける。72は水平口縁を有する高杯で、杯部が完存する。調整はヘラミガキを多用し、口縁部上面にヘラミガキによる斜格文を施す。73～76は甕で、外面調整は73がハケ、他はヘラミガキである。76は口縁部直下に2個一組の紐孔を施す。74・75は外面が煤ける。77・78は鉢である。77は口縁部外端面に刺突文、体部外面に3段の篆状文を巡らせる。78は口縁部外端面、体部外面に篆状文を巡らせる。79は大形の甕で、内面に横位ヘラミガキが認められる。80・81は甕底部で、体部外面に縱位ヘラミガキを施すもので、80は底面にも一定方向のヘラミガキを施す。共に煤・焦げが見られる。

SK 5

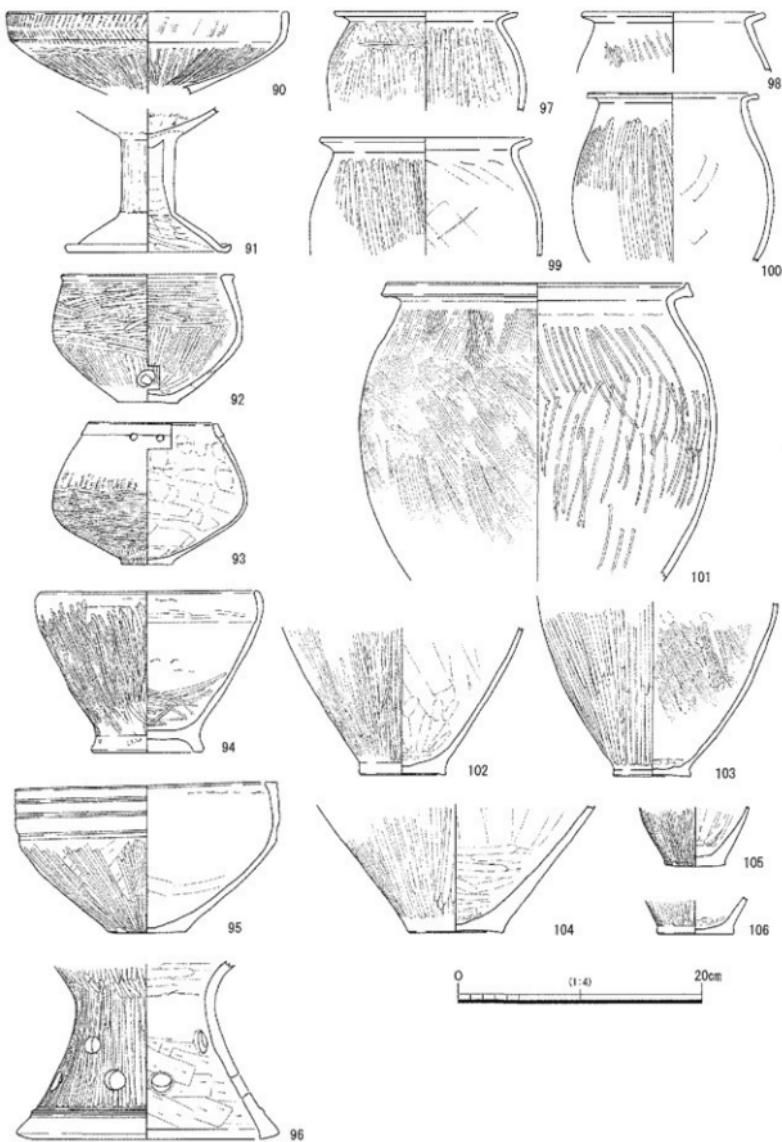
2区中央部検出の土坑で、東・西は調査区外に及ぶ。検出部分からは円形の平面形が想定できる。規模は南北2.4m以上・東西1.0m以上・深さ50cm以上を測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の単層である。遺物は出土していない。

SK 6

3区南部検出の土坑で、東・西は調査区外に及ぶ。規模は南北2.8m以上・東西1.0m以上・深さ約50cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の単層である。弥生時代中期後半の土器が出土しており、82・83を図化した。82は大形鉢で、調整は外面に縦位、内面に横位のヘラミガキを施し、垂下させた口縁部外端面に刺突文を施す。83は甕底部で、体部外面に縦位ヘラミガキを施す。



第15図 7区SK 7出土遺物①



第16図 7区SK7出土遺物②

SK 7

7区北部で検出した土坑で、西は調査区外に及ぶ。検出部分の平面形は半円形に近く、規模は南北1.2m以上・東西0.4m以上・深さ約80cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の2層からなる。弥生時代中期後半の土器が多く出土しており、84~106を図化した。把手を欠く水差形土器(89)や鉢の完形品(93~95)等の遺存状況良好な個体も見られる。84~88は広口壺である。84・85は口縁部外端面・頸部外面に簾状文を施すもので、口縁部外端面には刺突文を巡らせる。85は口縁部内面にヘラミガキを施す。86・87は口縁部外端面に刺突文を巡らせるもので、調整は外面が継位へラミガキ、内面は86が斜位ハケ、87は横位へラミガキである。88は受口状口縁の広口壺で、口縁部外面の上端・下端に凹線文を、頸基部に櫛描列点文を巡らせる。頸部外面調整はハケで、上下で原体が異なる。89は水差形土器で、把手を欠く以外はほぼ完存する。調整は継位・横位のヘラミガキである。口縁部外面には4段に列点文を巡らせるが、最上段の口縁端部を除いて把手部分の上位が途切れて全周しない。底部~体部にかけて黒斑を有する。体部の2箇所に外からの貫通する孔が見られるが、意図的な穿孔の可能性もある。90・91は高杯である。90は杯部で、口縁部外面に縁杉状に櫛描列点文を巡らせる。調整はヘラミガキである。91は脚部で、脚柱部外面に継位へラミガキを施す。92・93は無頸壺で、93は完形である。92は全体にヘラミガキ調整を施す。体部下位に見られる穿孔は内面からであるが、意図的なものかは不明である。外面が煤ける。93は器壁の剥離が著しく不明瞭であるが、外面調整は底面までヘラミガキで、体部には簾状文が認められる。口縁端部やや下位には2個一対の紐孔を有する。内外面に黒斑が認められる。94・95は鉢で、共に完形である。94は高台を有し、直線的に聞く体部から口縁部が短く内湾するもので、形態的に類例の少ないものと考えられる。調整はヘラミガキを多用する。内面全面に黒斑が認められる。95は口縁部外面に3段に凹線文を巡らせる。体部外面はヘラケズリ後継位のヘラミガキである。底部内外面に黒斑が認められる。96は台付き鉢の脚台部である。直径1.5cm程度の円孔を2段6方向に千鳥状に施し、脚端部との境に凹線文を2条巡らせる。調整は外面へラミガキ、内面へラケズリで、内面上部には鉢部の剥離痕が認められる。97~106は甕である。101を除いて、外面に継位のヘラミガキを施すいわゆる河内型甕である。101は口縁端部を肥厚させるもので、外面調整はハケ、内面にはヘラナデの際の継位の工具痕が明瞭に認められる。

SK 8

10区東部検出の土坑で、北東~南西方向のやや弧状を成す肩の一部を検出したもので、南東方向へ落ち込む状況である。検出部分の規模は一辺約1.2m・深さ最大26cmを測る。埋土はブロック状の单層である。遺物は出土していない。

SK 9

10区西部検出の土坑で、北西~南東方向の直線的な肩の一部を検出したもので、南西方向へ落ち込む状況である。検出部分の規模は一辺約1.0m・深さ最大24cmを測る。埋土はブロック状の单層である。弥生時代中期後半の土器が少量出土した。

SP 1~12

3区で2個(SP 1・2)、6区で1個(SP 3)、10区で9個(SP 4~12)を検出した。平面形はSP 4・5が方形を呈する可能性があり、他は円形を基調とするものである。法量では概ね径20~30cmのもの(SP 1・10・他)と、40~50cmのもの(SP 2・11・他)に分けられる。埋土はい

ずれもブロック状の单層である。遺物は S P 2・8・9から弥生時代中期後半までの土器、S P 5から弥生時代後期の土器が少量出土した。107は S P 5出土の壺である。口縁端部を摘み上げるもので、後期中葉に位置付けられる。108は S P 8出土の壺で、頸部に1条の沈線を巡らせるようであるが不明瞭で断定はできない。前期～中期に比定される。

S D 1

1区検出の北西～南東方向の直線的な溝である。

北部は S K 1に、南部は S K 2に削平されている。

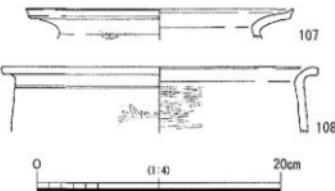
規模は検出長約1.7m・幅約35cm・深さ約10cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の单層である。遺物は弥生時代中期後半の土器、サスカイト剥片が出土した。69は短頸壺、あるいは水差形土器の口縁部である。口縁部外面の調整は継位ヘラミガキで、端部外面には不明瞭で断定はできないが2条の凹線を巡らせているようである。

N R 1

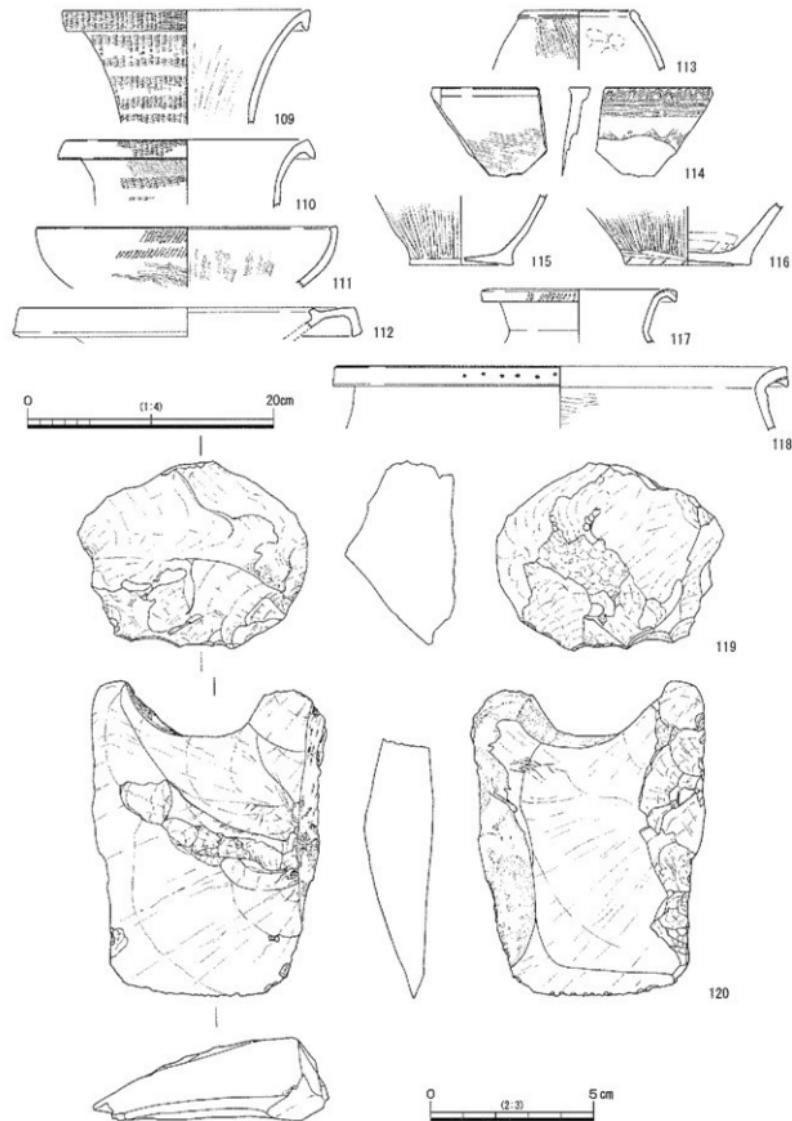
8区検出の東西方向の自然河川である。法量は幅4.0m以上・深さ最大約70cmを測る。堆積土は細粒砂～粗粒砂の互層である。弥生時代の包含層である11・12層を削平するもので、時期的には古墳時代以降に比定される。遺物は出土していない。

包含層出土遺物

109～120を図化した。109・110は口縁端部を垂下させる広口壺で、口縁部・頸部の外面に簾状文を巡らせる。111は高杯で、調整はヘラミガキを施し、口縁部外面に櫛描刺突文を巡らせる。112は水平口縁を有する高杯である。113は無頸壺で、調整は継位ヘラミガキである。114は大形鉢で、方形に肥厚させた口縁端部外端面に波状文、口縁部外面に直線文・波状文を巡らせる。内面調整はハケである。115・116は壺底部で、体部外面に継位ヘラミガキを施す河内型壺である。116は底面もヘラミガキである。117は広口壺で、口縁端部に刺突文を施す。118は大形壺で、口縁端部に刺突文を巡らせる。119・120はサスカイト製石器である。119は下辺に両側からの調整剥離を施し、刃部に潰れが認められることから、楔形石器の可能性がある。120は上面～片側面に自然面を、また両面に主要剥離面を残す。片方の側部に片面からの調整剥離を施しており、楔形石器、あるいは削器としての使用が考えられる。これらの出土地区は、117が2区、118が5区、120が8区、その他は1区である。



第17図 10区 S P 5・8出土遺物



第18図 包含層出土遺物

4.まとめ

第24次調査では、弥生時代前期～後期初頭、平安時代の遺構・遺物を検出した。遺物量はコンテナ3箱である。

第2・3面では北部・東部の調査地と同様に、弥生時代中期後半を中心とする集落遺構を検出した。包含層中の遺物量も濃密で、集落の中心と言える状況である。包含層中には弥生時代前期の土器も見られ、遺構は検出されなかったものの、集落の時期は該期に遡るものと考えられ、当地が長期に亘って集落域であったことが確認されたと言えよう。1区検出の平安時代後期の遺構については不明な点が多いが、該期の遺構は周辺の調査では確認されておらず、今後注意が必要である。

第29次調査では、弥生時代中期後半～後期の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ5箱である。

検出した遺構は弥生時代中期後半が中心であるが、遺構が濃密に検出された南端の10区では前期の土器や後期の遺構が見られ、北側の第24次調査と同様に、当地が長期に亘って集落域であったことを確認した。弥生時代中期後半では、2区SK4、7区SK7から遺存状態の良好な一括性の高い土器が多く出土しており、当該期の土器研究において貴重な資料となろう。

参考文献

- ・阿部幸一・今村道雄・田代克己・他1980『恩智遺跡』瓜生堂遺跡調査会
- ・岡田清一2005「Ⅲ 恩智遺跡第15次調査(OJ 2004-15)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告82』財団法八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一2006「Ⅶ 恩智遺跡第16次調査(OJ 2005-16)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告86』財団法八尾市文化財調査研究会



調査地遠景(北から)



1区機械掘削(南から)



1区第1面(南から)



1区西壁



1区東壁



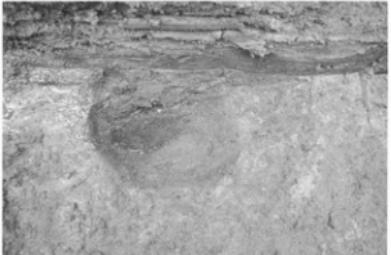
1区調査状況(北西から)



2区機械掘削(南から)



2区S K321検出(北から)



2区SK321(西から)



2区SD321検出(南から)



2区西壁北部



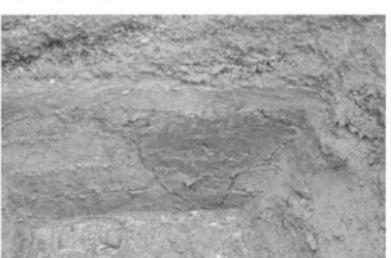
3区第1面(東から)



3区第2面検出(東から)



3区第2面(南から)



3区SD321西壁



3区西壁

I 恵智遺跡第24・29次調査(O J 2011-24・O J 2012-29)



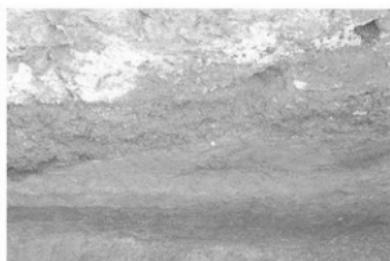
調査地北部(南から)



調査地南部(北から)



1区全景(西から)



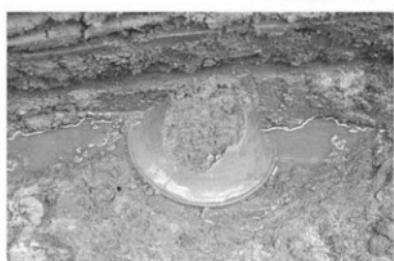
1区東壁



2区機械掘削(北から)



2区SK 3~5(東から)



2区SK 4上層遺物出土状況(西から)



2区SK 4下層遺物出土状況(西から)



I 恵智遺跡第24・29次調査(O.J. 2011-24, O.J. 2012-29)



5・6区間探乱状況(北東から)



6区全景(南から)



6区西壁



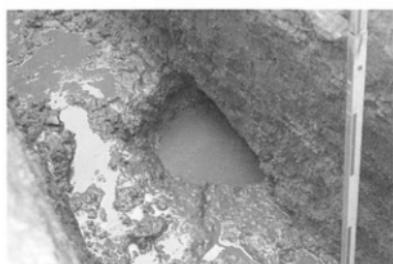
6区調査状況(南東から)



7区全景(南から)



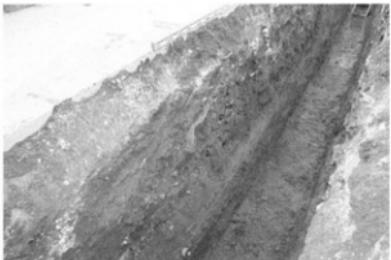
7区SK7遺物出土状況(東から)



7区SK7(北東から)



7区SK7西壁



8区西壁



9区全景(南東から)



9区西壁



10区機械掘削(南から)



10区遺構検出状況(東から)



10区全景(南から)



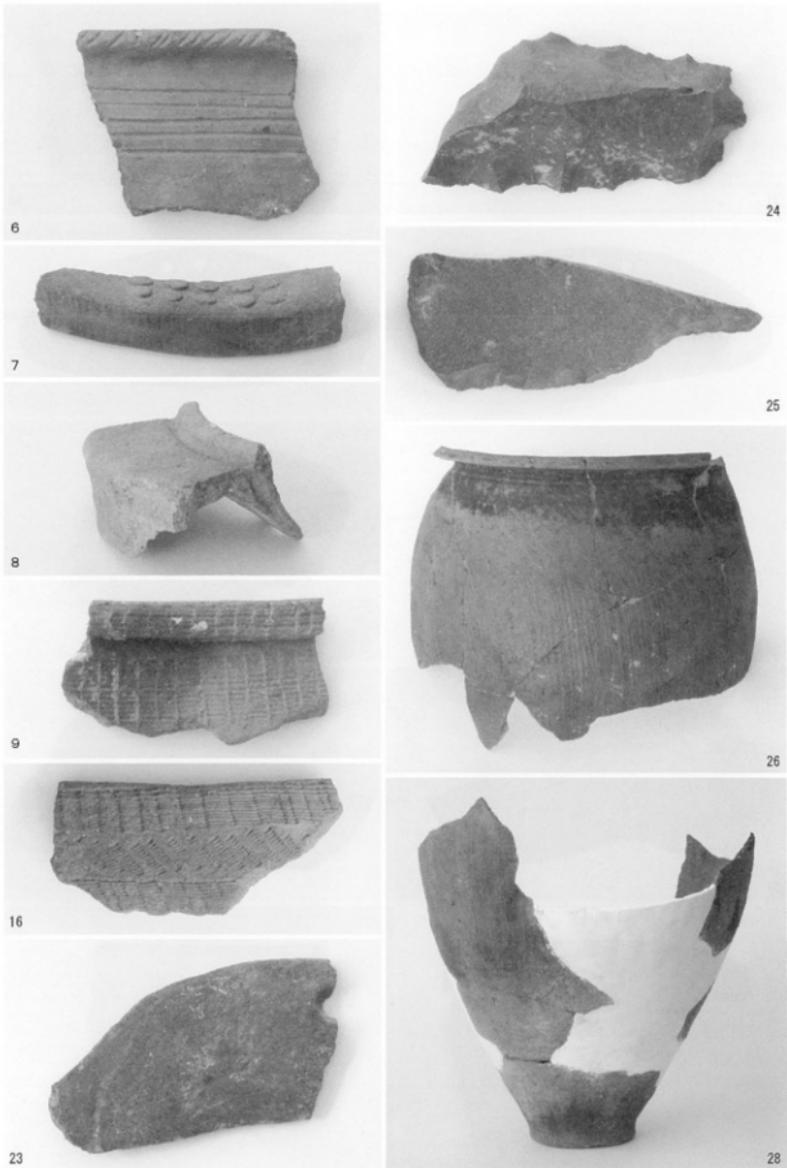
10区SP 5(南から)

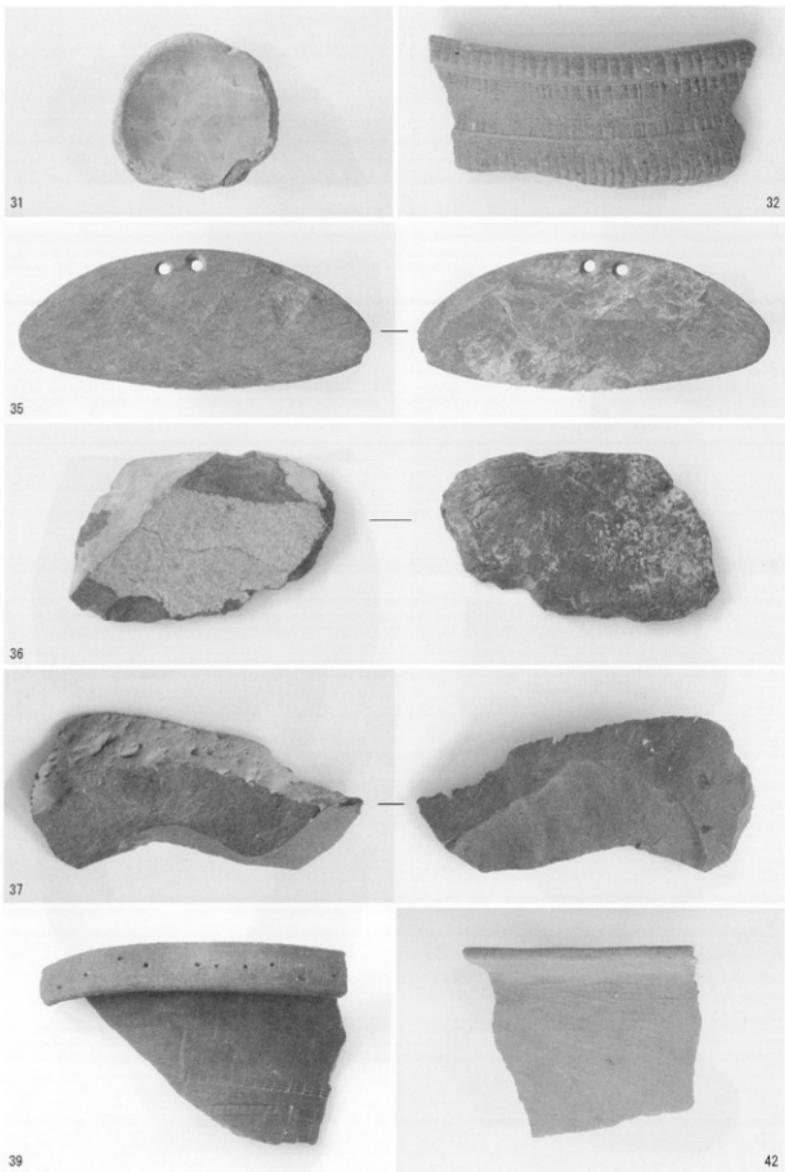


10区北壁

図版
7

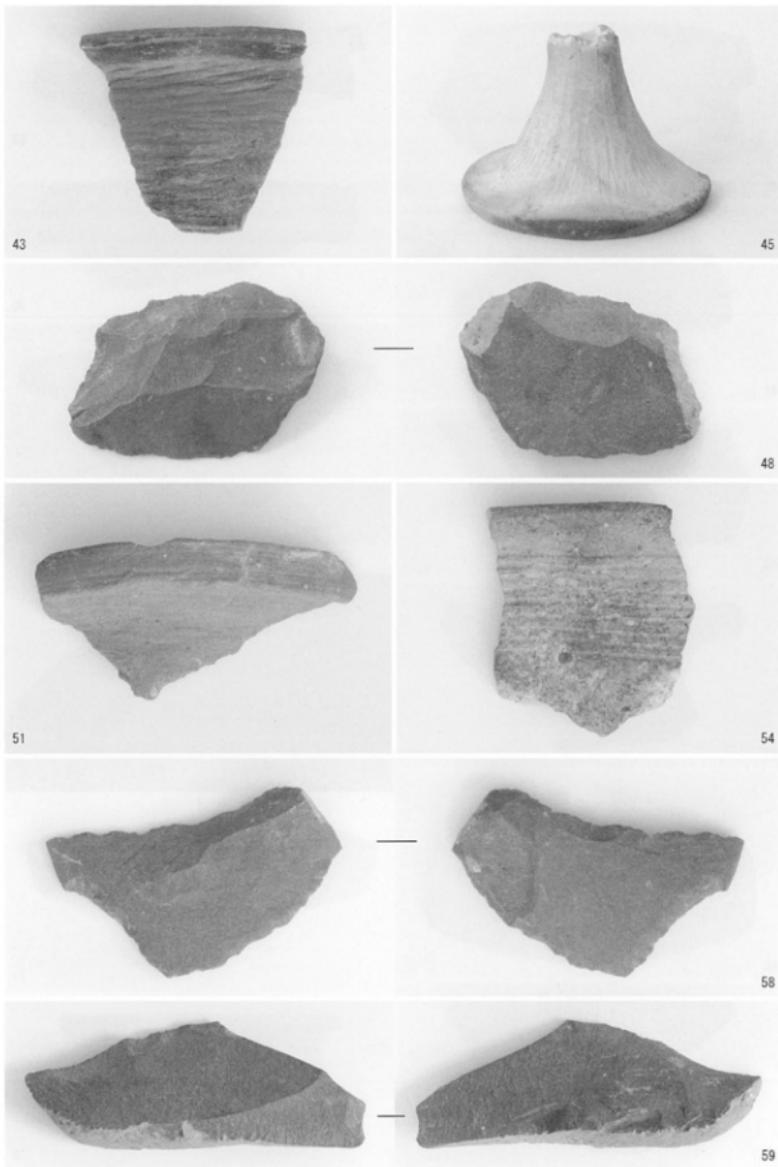
第24次調査



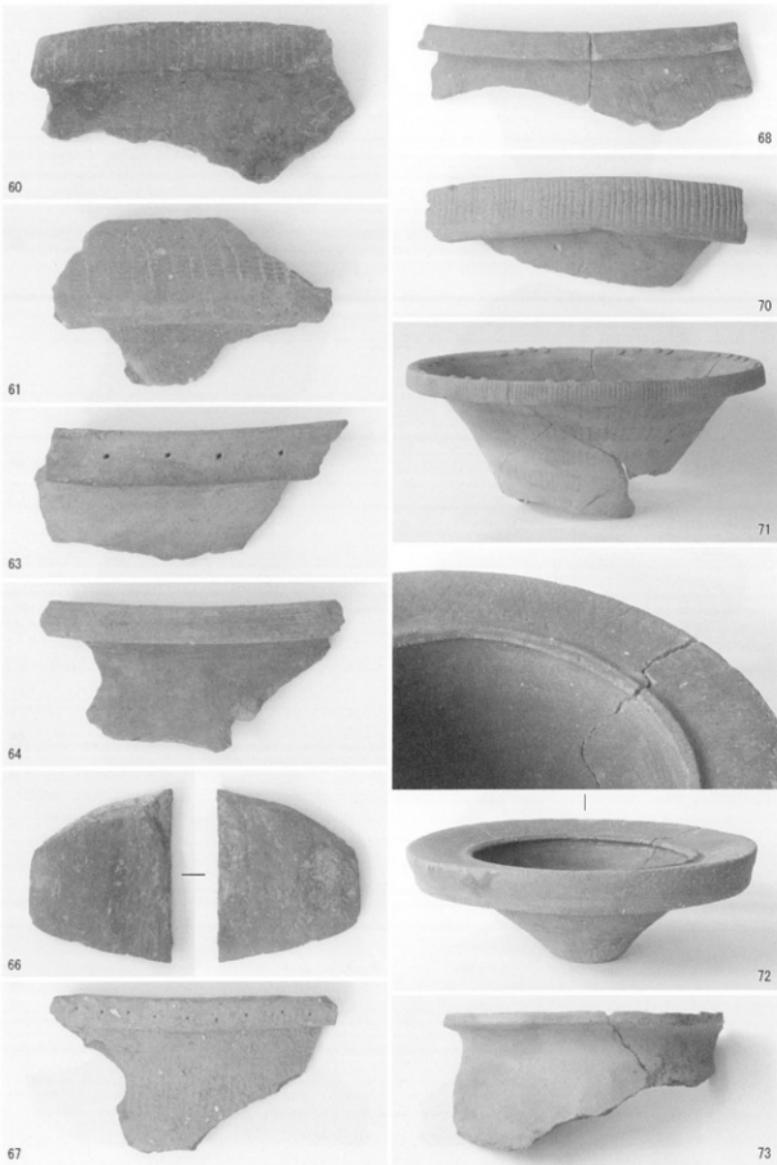


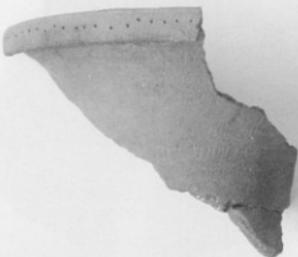
図版
9

第24次調査



圖版 10
第29次調查





78

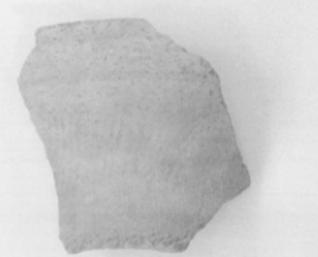
80



1



89



88



92



90



93



91



94



95



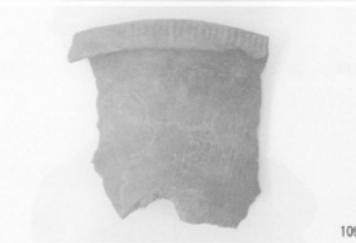
96



103



99



109



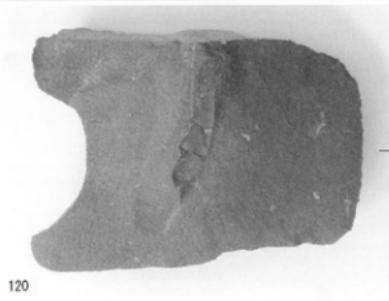
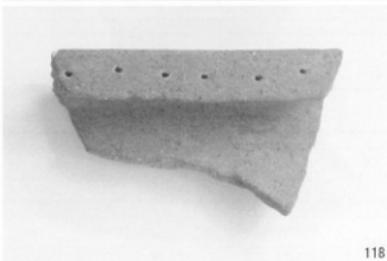
100



110



111



II 亀井遺跡第19次調査(KM2015-19)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市亀井町一丁目4番1号(亀井小学校)で実施した亀井小学校校舎増築に伴う亀井遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する亀井遺跡第19次調査(KM2015-19)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成27年5月14日・15日(外業実働2日)に、樋口 薫を調査担当者として実施した。調査面積は約25.0m²である。
1. 現地調査においては、塙内洋平・百々勝弘の参加を得た。
1. 内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成28年3月31日をもって終了した。
デジタルトレースー樋口
1. 本書の執筆・編集は樋口が行った。

本 文 目 次

1.はじめに.....	37
2.調査概要.....	38
1) 調査の方法と経過.....	38
2) 基本層序.....	39
3) 検出遺構と出土遺物.....	40
3.まとめ.....	40

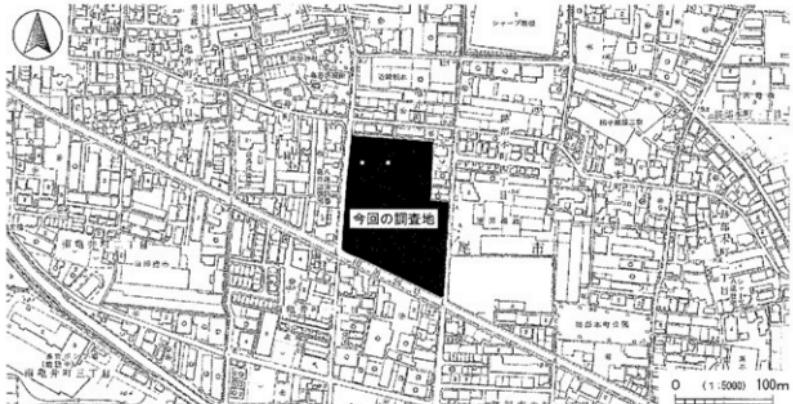
II 亀井遺跡第19次調査(KM2015-19)

1. はじめに

大阪府の東部に所在する八尾市は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川によって区画された河内平野の南東部に位置する。今回報告する亀井遺跡は、本市の西部、現在の行政区画では、亀井町一～四丁目及び南亀井町一～五丁目の東西約0.6km、南北約0.8kmがその範囲と推定されている。地形的には、旧大和川水系の主流であった長瀬川と平野川に挟まれた低位冲積地上に立地する。現地表面高を見ると、遺跡南東端が最も高く標高9.3m前後、北西端が最も低く標高8.8mで、比高差は約0.5mを測る。概ね南東から北西に緩やかに傾斜する地形を有している。

本遺跡は、昭和43(1968)年に大阪中央環状線建設に先立つ平野川改修工事が行われた際、多量の弥生土器が出土したことによりその存在が確認された。以後、昭和44(1969)年の近畿自動車道建設予定地内における試掘調査と本調査が、大阪府教育委員会、財団法人大阪文化財センターにより行われたことを契機に、昭和53(1978)～55(1980)年には長吉ポンプ場建設に伴う発掘調査、昭和63(1988)年には平野川改修工事に伴う発掘調査といった大規模な調査が、大阪府教育委員会、財団法人大阪文化財センターのもと実施されてきた。また八尾市教育委員会や当調査研究会による小規模な調査も行われており、その結果、本遺跡の規模が東西、南北ともに500m以上の範囲を有することや、弥生時代前期～近世にかけての複合遺跡で、特に弥生時代前期～後期に濃密な遺跡を包含していることなどが明らかになりつつある。

本遺跡の周辺には、同地形上に、東に跡部遺跡、西に竹割遺跡、北に久宝寺遺跡・加美遺跡(大阪市)、南に長原遺跡(大阪市)・城山遺跡(大阪市)など縄文時代晩期～中世にかけての遺構・遺物を多量に含む遺跡が展開しており、遺跡の密集地として知られている。



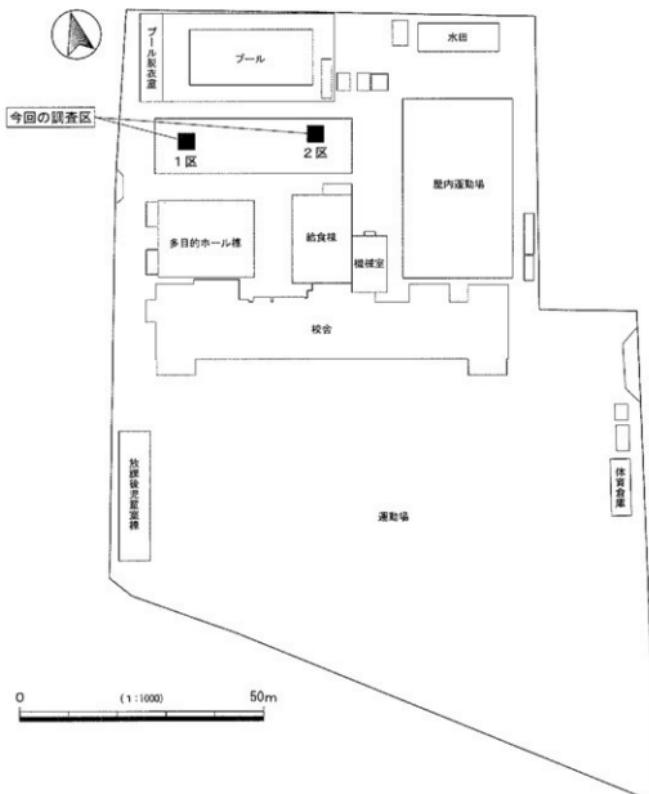
第1図 調査地周辺図

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、亀井小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財遺構確認調査で、当研究会が亀井遺跡で実施した第19次調査にあたる。調査は、八尾市教育委員会作成の調査指示書に基づき、現地表（T.P.+9.0m前後）下2.5mまでを重機と人力を併用して掘削し、平面的な調査を実施、遺構・遺物の検出に努めた。調査区は、約3.5×3.5m、面積約12.25m²箇所（西から1・2区）である。調査総面積は約25.0m²を測る。調査で使用した標高は、八尾市街区補助点4B074（調査地北西交差点：T.P.+9.089m）である。

調査の結果、弥生時代と古代に比定される作土層を確認した。出土遺物は、土師器や須恵器の細片などで、コンテナ（縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m）1箱を数える。



第2図 調査区位置図

2) 基本層序

現地表(T.P.+9.0m前後)下0.4~0.8m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土層、及び攪乱(0層)である。以下現地表下2.5m前後までの1.7~2.1m間において11層の基本層序を確認した。1層は1区で確認した旧作土層(T.P.+8.3m)である。2層は1区で確認した作土層(T.P.+8.2m)である。3層は2区で確認した作土層(T.P.+8.6m)で、島畑作土層の可能性がある。5層に細分できた。4層は河川堆積層(T.P.+7.9~8.0m)である。5・6層は1区で確認した作土層(5層:T.P.+7.9m 6層:T.P.+7.6m)である。7層は黄灰色を帯びた作土層(T.P.+7.3m)である。8層は河川堆積層(T.P.+7.2m)である。ラミナ構造を認める。9層は河川堆積層(T.P.+7.0m)で、植物遺体ラミナを認めるほか炭酸カルシウムが混在していた。10層は2区で確認した暗灰色を帯びた作土層(T.P.+6.4m)である。11層は河川堆積層(T.P.+6.3~6.9m以下)である。

0層：現代の整地に伴う客土・盛土層・攪乱

1層：暗灰色(N3/)粘土質シルト

1区で確認した旧作土層(T.P.+8.3m)である。層厚は15~20cmを測る。グライ化の極めて顯著な攪拌層である。

2層：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土質シルト

1区で確認した作土層(T.P.+8.2m)である。層厚は10~20cmを測る。

3層：にぶい黄色(2.5Y6/3)~暗灰黄色(2.5V5/2粗粒砂~細礫混粘土質シルト~シルト

2区で確認した作土層(T.P.+8.6m)である。層厚は75cmを測る。雲状酸化鉄分の沈着を認める攪拌層で、島畑作土層の可能性がある。5層に細分できた。

4層：青灰色(5B5/1)~橙色(7.5YR6/6)粘土質シルト~細粒砂

河川堆積層(T.P.+7.9~8.0m)である。層厚は10~40cmを測る。1区に比して2区の方が層厚を増していることから、本地の東方に流心をもつ河川に伴う堆積層と考えられる。2層に細分できた。

5層：にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土質シルト~シルト

1区で確認した作土層(T.P.+7.9m)である。層厚は10~20cm前後を測る。

6層：黄褐色(2.5Y5/3)粘土質シルト~シルト

1区で確認した作土層(T.P.+7.6m)である。層厚は約25cmである。

7層：黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルト

作土層(T.P.+7.3m)である。層厚は10~15cmを測る。

8層：青灰色(5B5/1)シルト~細粒砂

河川堆積層(T.P.+7.2m)である。層厚は20cm前後を測る。グライ化の顯著な地層で、ラミナ構造を認める。

9層：黒褐色(10YR3/1)~灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土~極細粒砂

河川堆積層(T.P.+7.0m)である。層厚は20~40cmを測る。植物遺体のラミナ構造を認める地層である。1区では3層に細分できた。

10層：暗灰色(N3/)シルト質粘土~粘土質シルト

2区で確認した作土層(T.P.+6.4m)である。層厚は10~18cmを測る。炭化物や植物遺体が

混在する搅拌の顯著な地層である。

11層：灰色(5Y6/1)～灰色(N5/)粘土質シルト～中粒砂

河川堆積層(T.P.+6.3～6.9m以下)である。層厚は10～40cm以上と推測される。ラミナ構造の発達した地層で、2区に比して1区の方が粗粒化が顯著である。本地の西方に流心を有する河川に伴う地層と考えられる。

3) 検出遺構と出土遺物

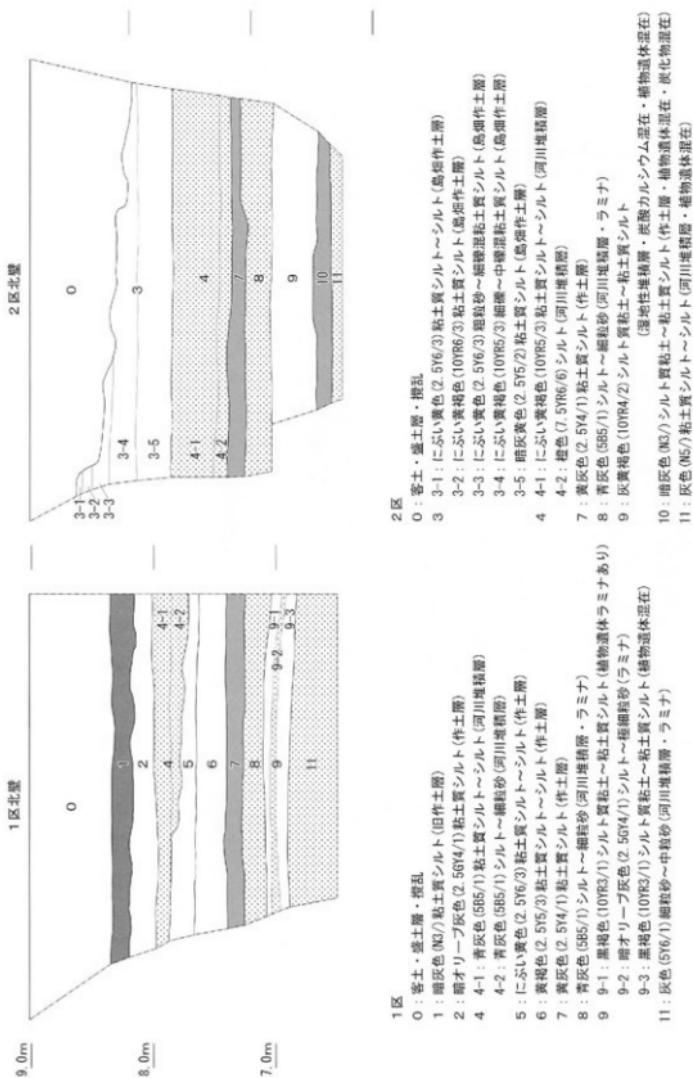
検出遺構はなし。出土遺物は、2・3層作土層から時期不明の土師器や須恵器の細片が少量出土した。いずれも図化はできなかった。

3.まとめ

今回の調査では、河川堆積層と作土層が互層を成して存在する様相を確認することができた。この内、作土層と考えられる7層(T.P.+7.3m)と10層(T.P.+6.4m)は、黄灰色～暗灰色を帯びており、色調的特徴から本地周辺における鍵層になりうる地層と考えられる。本地の南西約200mに位置する第15次調査地では、T.P.+7.4m付近において奈良時代に比定される土壤化層を、T.P.+5.8～6.2m付近において弥生時代前期～中期の遺物包含層を検出、当該期の居住域の存在を示唆する成果を得た。これらの成果から勘案すると、今回の調査における7層作土層は前者に、10層は後者に帰属する可能性が高い。当該期の居住域と生産域の位置関係を推測する上で注目すべき成果と言えよう。

参考文献

- ・樋口 進2011「(3)亀井遺跡第15次調査(KM2010-15)」『平成22年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会



第3図 断面図



調査地周辺状況(南西から)



1区北壁(南から)



1区北壁(南西から)

図版
2



調査地周辺状況(北東から)



2区北壁(南から)



2区北壁(南から)

III 竹渕遺跡第11次調査(TK2015-11)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市竹渕東四丁目3番1の一部及び3番2で実施した(仮称)竹渕コミュニティセンター建設に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する竹渕遺跡第11次調査(TK2015-11)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成27年12月25日(外業実働1日)に、西村公助を調査担当者として実施した。調査面積は約9.0m²である。
1. 現地調査においては、垣内洋平・永井律子の参加を得た。
1. 内業整理業務は西村が行い、現地調査終了後随時実施し、平成28年3月31日に完了した。
1. 本書の執筆・編集は西村が行った。

本　文　目　次

1.はじめに.....	45
2.調査概要.....	46
1) 調査の方法と経過.....	46
2) 基本層序.....	46
3) 検出遺構と出土遺物.....	46
3.まとめ.....	46

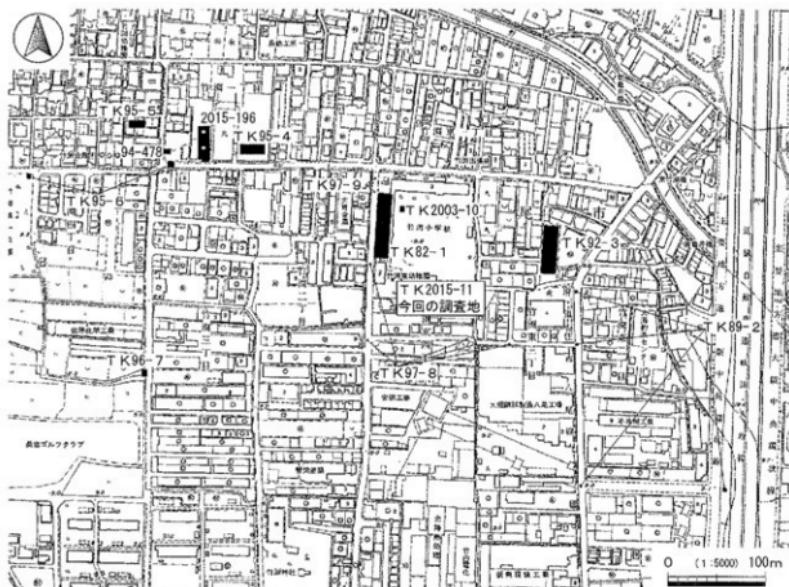
III 竹渕遺跡第11次調査(TK2015-11)

1. はじめに

竹渕遺跡は、大阪府八尾市の西部に位置し、現在の行政区画では竹渕一～五丁目、竹渕東一～四丁目の約0.8km四方がその範囲とされている。地形的には、旧大和川が形成した沖積平野に立地し、遺跡の北東側には旧大和川の支流であった平野川が存在している。当遺跡は東側で亀井遺跡、北側で加美遺跡、南側で長原遺跡に接している。

当遺跡は、昭和57(1982)年度に実施した竹渕小学校の校舎建替えに伴う遺構確認調査で、古墳時代後期の遺物を含む地層が確認されたことにより、遺跡として認識されるようになった。その結果を受け、八尾市文化財調査研究会は、同年校舎建替えに伴う第1次調査(TK82-1)を実施した。その結果、古墳時代後期の堅穴住居などを検出し、居住域として機能していた可能性が高くなかった。

今回の調査地は、第1次調査地の南約15mに位置している。本地の周辺では、西側で下水道工事に伴う調査(TK97-8・TK97-9)が行われており、古墳時代後期～平安時代に相当する地層を確認している。また、第1次調査地の東隣で、竹渕小学校給食配膳室設置工事に伴う調査(TK2003-10)を実施しており、古墳時代後期と平安時代前期の地層を確認している。さらに、



第1図 調査地周辺図

本地の東約150mに位置する第3次調査地(TK92-3)では、弥生時代前期の土坑や古墳時代後期(6世紀初頭)の方墳が検出されている。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、(仮称)竹測コミュニティセンター建設に伴う埋蔵文化財遺構確認調査業務で、当調査研究会が竹測遺跡内で行った第11次調査(TK2015-11)である。平面規模約3.0×3.0m、面積約9.0m²1ヶ所について、現地表(T.P.+9.1m)下3.0m前後までを人力・機械掘削併用して調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角点20B64(調査地南西部:T.P.+8.906m)である。

2) 基本層序

現地表下0.6~1.6mまでは、現代の整地に伴う客土・盛土層(0層)である。以下現地表下3.0m前後までの1.4~2.4m間ににおいて7層の基本層序を確認した。1層は旧作土層(T.P.+8.5m)である。2層は河川堆積層(T.P.+7.8~8.3m)である。3層は作土層(T.P.+8.7~8.8m)である。4層は河川堆積層(T.P.+7.1~7.3m)である。5層は古墳時代後期以降の遺物包含層(T.P.+7.0~7.1m)である。6・7層は河川堆積層(6層:T.P.+6.8~6.9m 7層:T.P.+6.8m)である。6・7層上面は土壤化している。

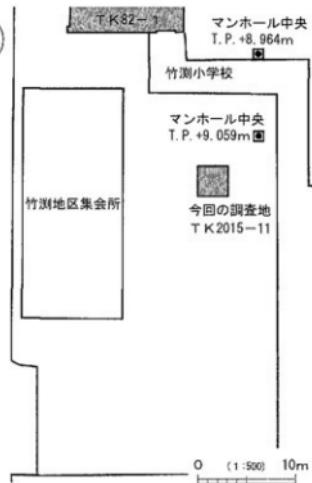
3) 検出遺構と出土遺物

6・7層上面で小穴2個(SP101・102)、溝1条(SD101)を検出した。SP101は北部で検出した。平面形状は円形で、径約0.4mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は褐灰色(7.5YR5/1)細粒砂混粘土である。SP102は南東部で検出した。平面形状は円形で、径約0.6mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.15mを測る。埋土は褐灰色(7.5YR5/1)細粒砂混粘土である。SD101は南東-北西方向に緩やかに曲がる溝で、幅0.9mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は灰褐色(7.5YR6/2)シルト混粘土で、土師器の細片が少量出土した。

その他、5層からは古墳時代後期以降と考えられる土師器の細片が少量出土した。

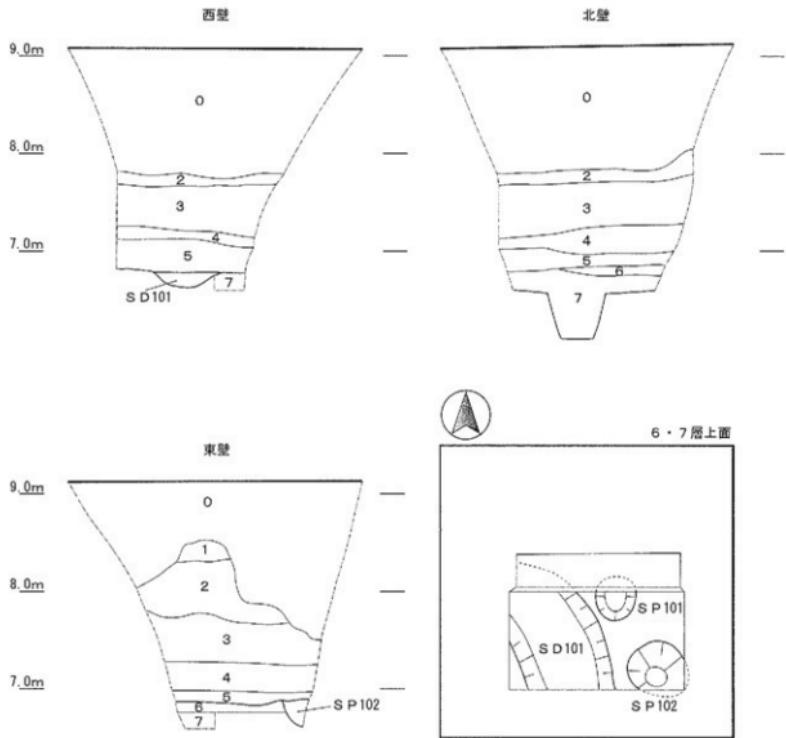
3. まとめ

今回の調査では、6・7層上面において古墳時代後期に相当する遺構を確認した。また、5層は古墳時代後期以降の遺物包含層であることを確認した。これらの遺構および遺物包含層は、北約15mの第1次調査地(TK87-1)でも検出しており、同時期の居住域は南へ広がっていることが明らかになった。



第2図 調査区位置図

III 竹洞遺跡第11次調査(TK2015-11)



- 0 : 客土・盛土層
 1 : 黒色(5Y2/1)細粒砂混粘土(旧作土層)
 2 : 暗青灰色(10BG4/1)粘土質シルト(河川堆積層)
 3 : 暗黄褐色(10YR6/8)シルト混粘土(作土層)
 4 : 黄灰色(2.5Y4/1)シルト(河川堆積層)
 5 : 暗青灰色(5B4/1)細粒砂混粘土(遺物包含層)土師器細片出土
 6 : 揺灰色(7.5YR5/1)シルト(河川堆積層)上面土壤化
 7 : 青灰色(10B65/1)シルト(河川堆積層)上面土壤化

SP101 : 揆灰色(7.5YR5/1)細粒砂混粘土
 SP102 : 揆灰色(7.5YR5/1)細粒砂混粘土
 SD101 : 灰褐色(7.5YR6/2)シルト混粘土

0 (1:50) 1 m

第3図 平・断面図

参考文献

- ・高萩千秋1989「II 竹測遺跡(第1次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 財団法人八尾市文化財調査研究会報告23』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一1992「III 竹測遺跡(TK89-2)」『平成4年度 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(II) 財団法人八尾市文化財調査研究会報告35』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則1993「X V 竹測遺跡第3次調査(TK92-3)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 財団法人八尾市文化財調査研究会報告39』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋1996「II 竹測遺跡第4次調査(TK95-4)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告54』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則1996「III 竹測遺跡第5次調査(TK95-5)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告54』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則1996「X 竹測遺跡第6次調査(TK96-6)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告53』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一1998「X III 竹測遺跡第7次調査(TK96-7)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子1999「IX 竹測遺跡第8次調査(TK97-8)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告62』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子1999「X 竹測遺跡第9次調査(TK97-9)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告62』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一2005「IV 竹測遺跡第10次調査(TK2003-10)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告85』財団法人八尾市文化財調査研究会



調査地周辺(北西から)



機械掘削(南西から)



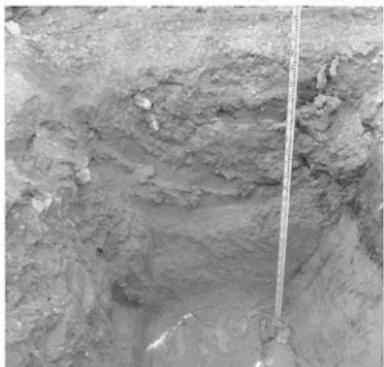
6・7層上面全景(南から)



北壁0～7層(南から)



東壁0～7層(西から)



西壁0～7層(東から)

IV 水越遺跡第19次調査(MK2015-19)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市千塚二丁目25番、82番、88番、89番、90番の一部、91番、92番で実施した高安中学校区における施設一体型小・中学校整備に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する水越遺跡第19次調査(MK2015-19)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成27年4月14日～平成27年4月21日(外業実働6日)に、西村公助を調査担当者として実施した。調査面積は約58.0m²である。
1. 現地調査においては、小野聰美・北垣治男・百々勝弘・永井律子の参加を得た。
1. 内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成28年3月31日に完了した。
遺物実測－市森千恵子・伊藤静江・永井
遺物トレース－伊藤
1. 本書の執筆・編集は西村が行った。

本　文　目　次

1.はじめに.....	51
2.調査概要.....	52
1) 調査の方法と経過.....	52
2) 基本層序.....	52
3) 検出遺構と出土遺物.....	55
3.まとめ.....	58

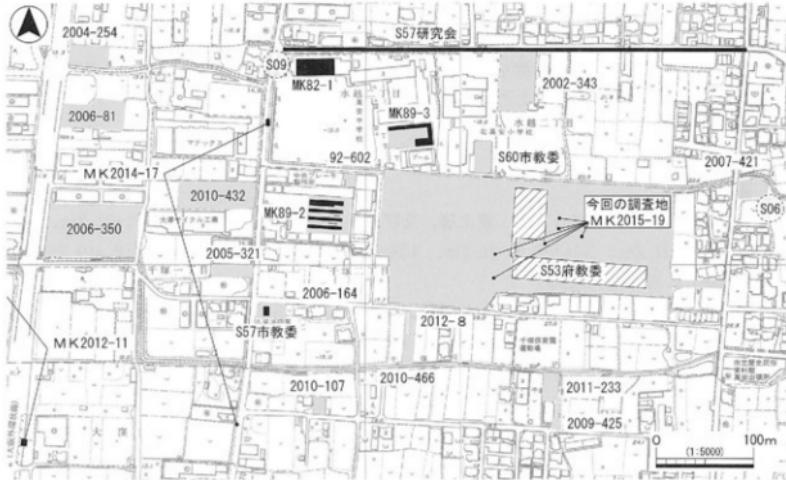
IV 水越遺跡第19次調査(MK2015-19)

1. はじめに

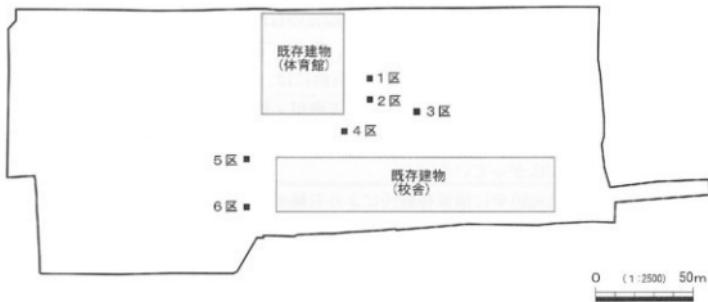
水越遺跡は、大阪府八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では西高安町一丁目、水越二・五・七丁目、千塚一～三丁目、服部川一～七丁目、神立一丁目、及び千塚、大窪、山畠、服部川一帯の約1.2km四方がその範囲とされている。地形的には、生駒山西麓から河内平野に続く扇状地上に立地し、西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は、北側で太田川遺跡・大竹遺跡、南側で郡川遺跡・高麗寺跡に接しており、東側には高安古墳群・高安千塚古墳群が広がっている。

当遺跡では、大正9(1920)年に清原得巖氏により石器が採集されて以来、縄文時代の石器や弥生～古墳時代の土器・玉作関係資料が多く採集され、「高安遺跡」、「千塚遺跡」等の名称で遺跡の存在が知られていた。そして昭和53(1978)年に最初の発掘調査として、大阪府教育委員会によって大阪府立清友高等学校建設に伴う調査(吉岡1988)【以下S53府教委調査と記載】が実施された。調査では既知の採集資料と同様の成果が得られた他、弥生～古墳時代の井戸・溝・方形周溝墓・土器溜等や、中世の掘立柱建物・井戸等が検出された。その後、八尾市教育委員会・当研究会により多次にわたる発掘調査が行われており、これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代中期～近世の複合遺跡であることが認識されている。特筆すべき成果として、遺跡範囲北部に当たる第2次調査(MK89-2)（西村1997）では、南北方向に延びる弥生時代中期の大溝が検出され、環濠集落の存在が推定されている。

今回の調査地は、S53府教委調査の校舎部分調査地の北側と西側に位置している。



第1図 調査地周辺図



第2図 調査区位置図

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、高安中学校区における施設一体型小・中学校整備に伴う調査で、当調査研究会が水越遺跡内で行った第19次調査(MK2015-19)である。

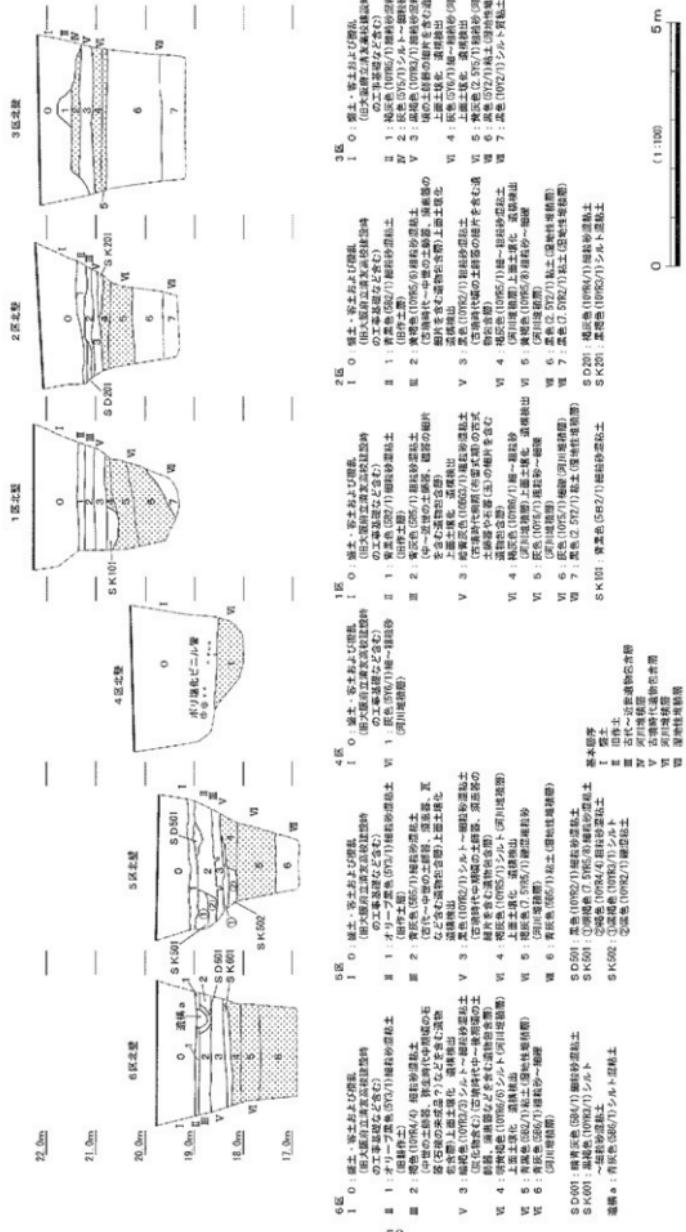
調査は、八尾市教育委員会文化財課の指示書に基づき、建物および防火水槽計画予定場所に6ヶ所の調査区(北から1～6区 総面積約58m²)を設定した。1・2・4～6区の規模は3.0×3.0m、3区の規模は3.5×3.5mを測り、現地表下約3.0mまでの地層について、人力・機械掘削を併用して実施した。調査で使用した標高は、八尾市街区補助点3C116(調査地南部:T.P.+20.052m)である。

2) 基本層序

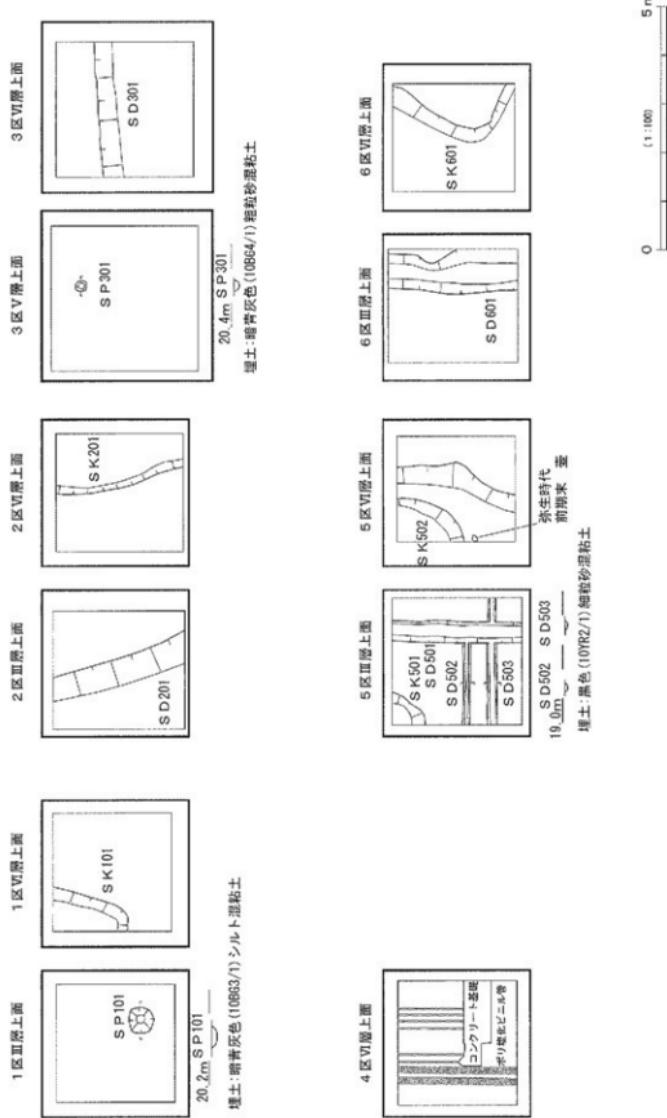
I層は、現代の整地に伴う客土・盛土層、及び攪乱である。上面は1区がT.P.+21.3m、2区がT.P.+21.0～21.2m、3区がT.P.+21.2m、4区がT.P.+20.2～20.3m、5区がT.P.+19.7～19.8m、6区がT.P.+19.8mを測る。

II層は、1～3・5・6区で確認した旧作土層である。上面は1・2区がT.P.+20.4m、3区がT.P.+20.8m、5区がT.P.+19.1m、6区がT.P.+19.0mを測る。

III層は、1・2・5・6区で確認した中～近世に比定できる遺物包含層である。上面は1・2区がT.P.+20.2m、5区がT.P.+19.0m、6区が18.9mを測る。1区からは、中～近世の土師器、磁器の細片が、2区からは、古墳時代～中世の土師器、須恵器の細片が、5区からは、古代～中世の土師器、須恵器の細片が、6区からは、弥生時代中期頃のものと思われるサヌカイト製の打製石器や中世の土師器の細片が出土した。なお、中世以前の遺物は混入品と考えられる。



第3図 断面図



平面圖 第4圖

本層の上部は土壤化している。1区では、小穴1個(S P 101)、2区では、溝1条(S D 201)、5区では、土坑1基(S K 501)・溝3条(S D 501~503)、6区では、溝1条(S D 601)を検出した。

IV層は、3区で確認した河川堆積層である。上面はT.P.+20.5mを測る。

V層は、1~3・5・6区で確認した古墳時代に比定できる遺物包含層である。1区からは、古墳時代前期【布留式期】の古式土師器の細片や結晶片岩製の管玉と思われる石器が、2・3区からは、古墳時代頃の土師器の細片が、5区からは、古墳時代中期頃の土師器・須恵器の細片が、6区からは、古墳時代中~後期頃の土師器・須恵器などの細片が出土した。上面は1区がT.P.+20.0m、2区がT.P.+20.1m、3区がT.P.+20.3m、5区がT.P.+18.6m、6区がT.P.+18.7mである。本層の上部は土壤化している。3区では、小穴1個(S P 301)を検出した。

VI層は、河川堆積層である。上面は1区がT.P.+19.8m、2区がT.P.+19.9m、3区がT.P.+20.1m、4区がT.P.+18.5~18.6m、5区がT.P.+18.5m、6区がT.P.+18.4mである。1~3・5・6区の上部は土壤化している。1区では、土坑1基(S K 101)、2区では、土坑1基(S K 201)、3区では、溝1条(S D 301)、5区では、土坑1基(S K 502)、6区では、土坑1基(S K 601)を検出した。

VII層は、1~3・5区で確認した湿地性堆積層である。上面は1区がT.P.+18.4~19.0m、2区がT.P.+19.2m、3区がT.P.+19.8m、5区がT.P.+17.3mを測る。

3) 検出遺構と出土遺物

1区

III層上面で小穴1個(S P 101)、VI層上面で土坑1基(S K 101)を検出した。

S P 101

調査区の南東側で検出した。平面形状は円形で、径約0.5mを測る。断面形状は、逆台形で、深さは0.1mを測る。埋土は暗青灰色(10B63/1)シルト混粘土で、近世の磁器碗(1)の細片が出土した。1の口縁部は内湾する。体部の外面に梅花文を描き、釉薬を塗る。18世紀頃に比定される。

S K 101

調査区の北西側で検出した。遺構の北西部は調査区外に至るため全容は不明である。検出した平面形状は、南北に長い半梢円形で、東西長約0.7m、南北長1.5mを測る。断面形状は、逆台形で、深さは0.2mを測る。埋土は青黒色(5B2/1)細粒砂混粘土の単層で、遺物の出土はなかった。

遺構に伴わない出土遺物

V層内からは古式土師器・石製品などが出土した。この内2点(2・3)を図化した。2は古式土師器甕である。口縁部は内湾し、端部は内側へ肥厚する。口縁部の内外面はヨコナデである。古墳時代前期布留式期に比定される。3は用途不明の石製品で材質は砂岩である。平面形状は長方形で、断面形状は半円形である。中央には溝状の窪みがある。

2区

III層上面で溝1条(S D 201)、VI層上面で土坑1基(S K 201)を検出した。

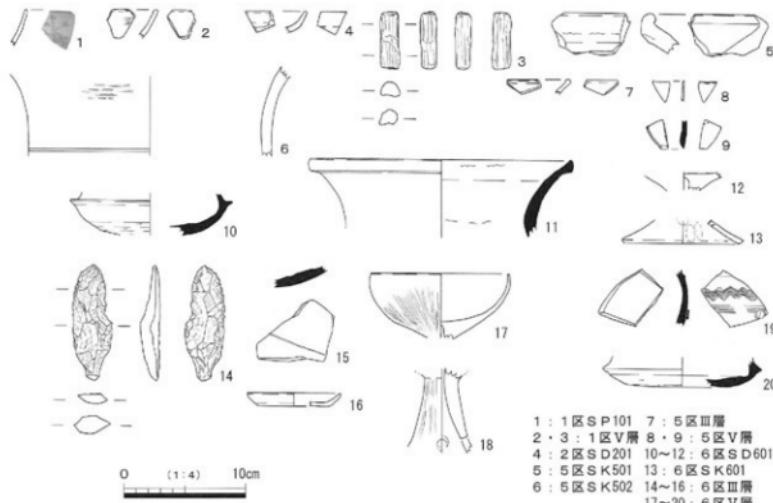
S D 201

調査区の西側で検出した。遺構の北西部は調査区外に至るため全容は不明である。平面形状は、南東~北西方向へ直線に延び、幅は1.8mを測る。断面形状は、逆台形で、深さは0.1mを測る。

埋土は褐灰色(10YR4/1)細粒砂混粘土の単層で、中世の土師器小皿の細片が出土した。この内1点(4)を図化した。4は土師器小皿で、口縁部は内湾する。口縁部の内外面はヨコナデである。中世に比定される。

S K 201

調査区の東側で検出した。遺構の東部は調査区外に至るため全容は不明である。検出した平面形状は、南北に長い半楕円形で、東西長約1.0m、南北長2.6mを測る。断面形状は、逆台形で、深さは0.1mを測る。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト混粘土の単層で、遺物の出土はなかった。



第5図 出土遺物実測図

3区

V層上面で小穴1個(S P301)、VI層上面で溝1条(S D301)を検出した。

S P301

調査区の北東側で検出した。平面形状は円形で、径約0.2mを測る。断面形状は、逆台形で、深さは0.1mを測る。埋土は暗青灰色(10BG4/1)粗粒砂混粘土の単層で、遺物の出土はなかった。

S D301

調査区の南側で検出した。遺構の南部は調査区外に至るため全容は不明である。平面形状は、東西方向へ直線に延び、幅は2.0mを測る。断面形状は、皿形で、深さは0.15mを測る。埋土は黒色(10Y2/1)細粒砂混粘土の単層で、遺物の出土はなかった。

4区

遺構および遺物はなかった。なお、I層内には、大阪府立清友高校建設時の配管やコンクリート基礎などが存在していることを確認した。

5区

III層上面で土坑1基(S K501)・溝3条(S D501~503)、VI層上面で土坑1基(S K501)を検出した。

S K501

調査区の北西側で検出した。遺構の北西部は調査区外に至るため全容は不明である。平面形状は半楕円形で、東西長は0.6m、南北長は0.7mを測る。断面形状は、逆台形で、深さは0.4mを測る。埋土は上から明褐色(7.5YR5/8)細粒砂混粘土、褐色(10YR4/4)粗粒砂混粘土で、中世の土師器羽釜や瓦器楕の細片などが出土した。この内1点(5)を図化した。5は土師器羽釜である。口縁部は内済し、端部は上方へ丸くつまみ出す。口縁部の外面はヨコナデである

S D501~503

S D501は南北方向、S D502・503は東西方向に直線に延びる溝で、幅は0.15~0.4mを測る。断面形状は、皿形で、深さは0.05~0.18mを測る。埋土は黒色(10YR2/1)細粒砂混粘土で、S D501からは中~近世の土師器、陶器、磁器、S D503からは古墳時代中~後期の土師器(混入)などの細片が出土した。

S K502

調査区の北西側で検出した。遺構の北西部は調査区外に至るため全容は不明である。平面形状は不定形で、東西長は1.6m、南北長は2.4mを測る。断面形状は、逆台形で、深さは0.3mを測る。埋土は上から黒褐色(10YR3/1)シルト、黒色(10YR2/1)礫混粘土で、弥生時代前期末の壺の細片が出土した。この内1点(6)を図化した。6は弥生時代前期末の壺である。頸部は外反し、頸部の内面はナデ、外面は横方向のヘラミガキと沈線文を施す。

遺構に伴わない出土遺物

III層からは古代に比定できる土師器皿が、V層からは古墳時代中期の土師器、須恵器などの細片が出土した。この内III層の1点(7)とV層の2点(8・9)を図化した。7は土師器皿である。口縁部は外反し、端部は内側へ丸く肥厚させる。外面はヨコナデである。8は土師器製塙土器

である。口縁部は直立し、端部は尖って終わる。内外面はヨコナデである。9は須恵器杯蓋である。口縁部は直線に延び、端部は凹線状の段を有す。内外面は回転ナデである。5世紀代に比定できる。

6区

III層上面で溝1条(S D 601)、VI層上面で土坑1基(S K 601)を検出した。

S D 601

調査区の東側で検出した。南北方向に直線的に延び、幅は0.6~0.9mを測る。断面形状は、逆台形で、深さは0.2mを測る。埋土は暗青灰色(5B4/1)細粒砂混粘土で、古墳時代中期の土師器(混入)や中世の土師器、須恵器の細片が出土した。この内3点(10~12)を図化した。10は須恵器高杯の口縁部である。口縁部は外反し、内外面回転ナデである。TK10型式頃に比定できる。11は須恵器壺である。口縁部は外反し、口縁部の内外面回転ナデである。古墳時代中~後期に比定できる。12は土師器高杯である。杯部は平らで、杯部の内外面はナデである。古墳時代中期に比定できる。

S K 601

調査区のはば全域で検出した。遺構の西部は調査区外に至るため全容は不明である。平面形状は不定形で、東西長は2.1m、南北長は2.5mを測る。断面形状は、逆台形で、深さは0.1mを測る。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト~細粒砂混粘土で、古墳時代中期の土師器高杯の裾部の細片(13)が出土した。裾部は「ハ」の字にひらく。杯部の内面はナデ、外面はハケのちナデである。古墳時代中期に比定できる。

遺構に伴わない出土遺物

III層からは弥生時代~中世の遺物の細片が、V層からは古墳時代中~後期の土師器・須恵器の細片が出土した。この内III層の3点(14~16)とV層の4点(17~20)を図化した。14はサヌカイト製の石鎌である。柳葉形で、両面に鎌がある。15は須恵器杯身である。杯部の内面は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリである。外面にはヘラ記号を施す。古墳時代中~後期に比定できる。16は土師器小皿である。口縁部は内湾する。口縁部の内外面はヨコナデ、体部内外面はナデである。中世に比定される。17は土師器高杯で、口縁部は内湾し、杯部は平らである。杯部の内面はナデ、外面は放射状のハケである。古墳時代中期に比定できる。18は土師器高杯で、脚部は「ハ」の字に緩やかに広がる。内面はナデ、外面は継方向のヘラミガキである。古墳時代中期に比定できる。19は須恵器鉢で、体部の内外面は回転ナデである。体部の外面に四線と波状文を施す。粘土を貼り付けた突起の部分がある。古墳時代中期に比定できる。20は須恵器杯身で、杯部は浅い。受部は短く水平である。杯部の内面は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリである。古墳時代後期に比定できる。

3. まとめ

今回の調査地では、弥生時代前期末、古墳時代、中世、近世の遺構を検出したほか、古墳時代の遺物包含層(V層)と中~近世の遺物包含層(III層)を確認した。

弥生時代前期末の遺構は、5区で検出したS K 501が相当する。同時期の遺物は、水越遺跡（西

村1983)、第1次調査(高萩1989)、第2次調査(西村1997)から出土しているが、周辺での調査では、同時期の遺物の出土量は少なく、遺構も希薄である。本地では同時期の遺構を確認したことから、近隣に遺構が広がっている可能性が高いと推測される。また、弥生時代中期の遺構は確認できなかった。しかし、6区のⅢ層遺物包含層から弥生時代中期に比定できるサヌカイト製の打製石鐵が出土しており、同時期の遺構の存在が予想される。さらに、S53府教委調査では弥生時代の方形周溝墓、溝、土器溜を確認し、墓域の存在が明らかになっており、本地にも同様の遺構が展開している可能性がある。

1区のV層遺物包含層からは、古墳時代前期の布留式期の土器とともに砂岩製の用途不明の石製品が出土した。S53府教委調査では管玉の未成品が出土しており、玉作に関連する遺構が周囲に存在している可能性が考えられる。また、第2次調査では、当該期の井戸を確認していることから、本地から西側一帯に居住域がある可能性が高い。

古墳時代中期の遺構は、6区で確認した。同区のV層遺物包含層からは同時代中～後期の遺物が出土し、5区のV層遺物包含層からも古墳時代中期の遺物が出土した。S53府教委調査では古墳時代の井戸などを検出しており、居住域の存在が明らかになっている。本地西部の5・6区では、同時代の遺物が1～3区に比べ多く出土していることから、居住域は西側へ広がっていると考えられる。

中世の遺構は2・5・6区で検出した。そのうち5・6区で確認した溝は、畑の歓溝と考えられる。S53府教委調査の校舎部分の東端では、中世の掘立柱建物や井戸が確認され、同時期の居住域の存在が明らかになっている。これらから、本地の東部に居住域、西部に生産域があることが明らかになった。

近世の遺構は本地北部の1区で確認した。S53府教委調査では確認していないことから、本地の北側に18世紀代の遺構が存在している可能性が高くなった。

参考文献

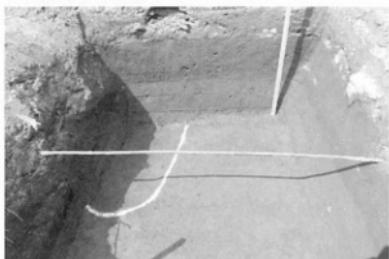
- ・吉岡 哲1988『紀要 清友 第1号』大阪府立清友高等学校
- ・西村公助1983「第2章 水越遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和56・57年度 財團法人八尾市文化財調査研究会報告3』財團法人八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋1989「I 水越遺跡(第1次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 財團法人八尾市文化財調査研究会報告23』財團法人八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋1990「9.水越遺跡(MK89-3)」『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度 財團法人八尾市文化財調査研究会報告28』財團法人八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助1997「V 水越遺跡第2次調査(MK89-2)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告57』財團法人八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助2007「2-22 水越遺跡(2006-165)の調査」『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書 八尾市文化財調査報告55 平成18年度国庫補助事業』八尾市教育委員会



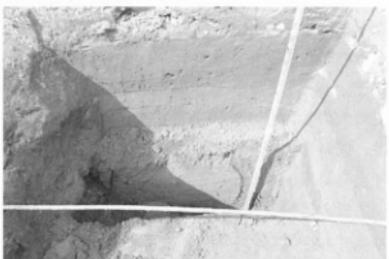
1区周辺(北東から)



1区Ⅲ層上面全景(南から)



1区VI層上面全景(南から)



1区北壁0～7層(南から)



2区周辺(北西から)



2区Ⅲ層上面全景(南から)



2区VI層上面全景(南から)



2区北壁0～7層(南から)



3区周辺(北西から)



3区V層上面全景(南から)



3区VI層上面全景(南から)



3区北壁0～7層(南から)



4区周辺(南東から)



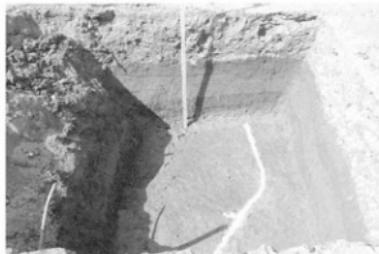
4区VI層上面全景(南から)



5区周辺(南西から)



5区III層上面全景(南から)



5区VI層上面全景(南から)



5区北壁0～6層(南から)



6区周辺(北西から)



6区III層上面全景(南から)



6区VI層上面全景(南から)



6区北壁0～6層(南から)



出土遺物

V 水越遺跡第22次調査(MK2015-22)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市大窪～服部川1丁目地内で実施した7次第100号配水管整備工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する水越遺跡第22次調査(MK2015-22)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成27年10月15日～平成27年11月20日(外業実働5日)に、西村公助を調査担当者として実施した。調査面積は約48.0m²である。
1. 現地調査においては、飯塚直世・伊藤静江・岡本武司・北垣治男・百々勝弘・松田逸朗の参加を得た。
1. 内業整理業務は西村が行い、現地調査終了後隨時実施し、平成28年3月31日に完了した。
1. 本書の執筆・編集は西村が行った。

本　文　目　次

1.はじめに.....	63
2.調査概要.....	64
1) 調査の方法と経過.....	64
2) 基本層序.....	64
3) 検出遺構と出土遺物.....	64
3.まとめ.....	66

V 水越遺跡第22次調査(MK2015-22)

1. はじめに

水越遺跡は八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では西高安町一丁目、水越二・五・七丁目、千塚一～三丁目、服部川一～七丁目、神立一丁目、及び千塚、大窪、山畠、服部川一帯の約1.2km四方がその範囲とされている。地形的には生駒山西麓から河内平野に続く扇状地上に立地し、西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で太田川遺跡・大竹遺跡、南側で郡川遺跡・高麗寺跡に接しており、東側には高安古墳群・高安千塚古墳群が広がっている。

当遺跡では大正9(1920)年に清原得巖氏により石器が採集されて以来、縄文時代の石器や弥生～古墳時代の土器・玉作関係資料が多く採集され、「高安遺跡」・「千塚遺跡」等の名称で遺跡の存在が知られていた。そして昭和53(1978)年に最初の発掘調査として、大阪府教育委員会によって大阪府立清友高等学校建設に伴う調査(S53府教委)が実施された。調査では既知の採集資料と同様の成果が得られた他、弥生時代～古墳時代の集落遺構(井戸・溝・方形周溝墓・方墳・土器櫛等)、中世の集落遺構(掘立柱建物・井戸等)が検出された。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次に亘る発掘調査が行われており、これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代中期～近世の複合遺跡であることが認識されている。

今回の調査地の周辺では、南東部で研究会第4・6・7・8・13次調査を実施している。これらの調査では弥生時代後期を中心とした遺構・遺物が検出され、この一帯が該期の集落域であったことが確認されている。さらに第7次調査では縄文時代晚期の土器埋納ピットの可能性がある遺構の他、平安時代では土坑や地鎮祭祀を示唆するような土器埋納ピットが検出されており特筆される。



第1図 調査地周辺図

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、7次第100号配水管整備工事に伴う調査で、当調査研究会が水越遺跡内で行つた第22次調査(MK2015-22)である。

調査区は発進立坑の1箇所である。平面形状は、南北に長い長方形(6×8m)で、面積は48m²である。調査は、現地表(T.P.+14.0m)下約6.6mについて、人力・機械掘削を併用して実施した。

調査では、調査区付近に位置する工事使用のベンチマーク(調査区南東部:T.P.+13.854m)を標高の基準とした。

2) 基本層序

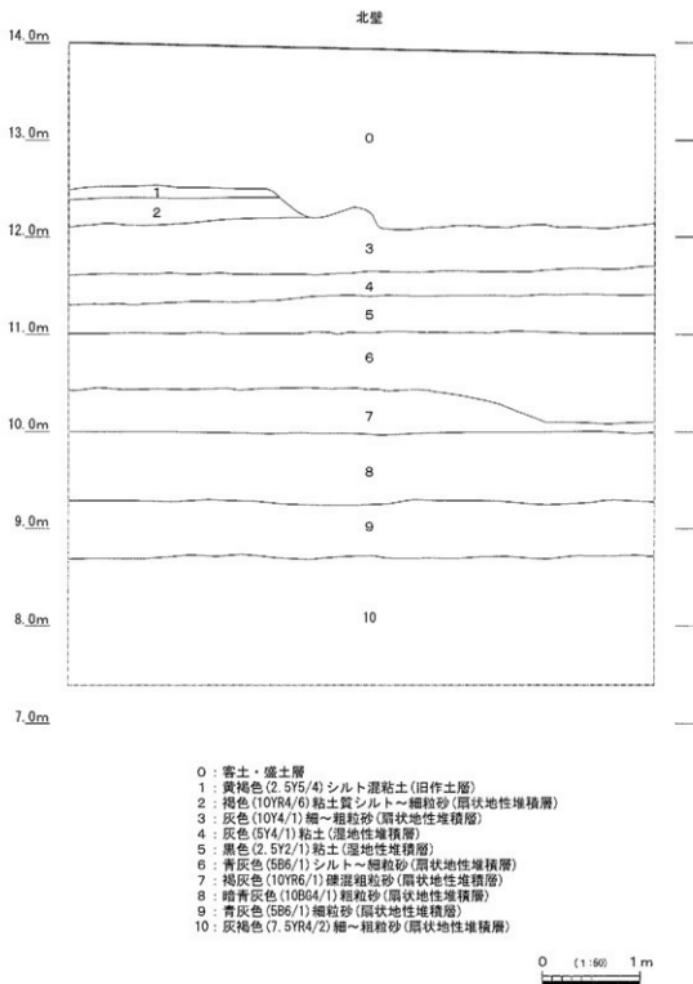
現地表下1.5mまでは、現代の整地に伴う客土・盛土層、及び攪乱(0層)である。以下現地表下6.6m前後までの5.1m間において10層の基本層序を確認した。1層は旧作土層(T.P.+12.5m)である。2・3層は扇状地性堆積層(2層:T.P.+12.4m 3層:T.P.+12.1~12.2m)である。4・5層は湿地性堆積層(4層:T.P.+11.6~11.7m 5層:T.P.+11.3~11.4m)である。6~10層は扇状地性堆積層(6層:T.P.+11.0m 7層:T.P.+10.1~10.4m 8層:T.P.+10.0m 9層:T.P.+9.3m 10層:T.P.+8.7m)である。

3) 検出遺構と出土遺物

遺構の検出及び遺物の出土はなかった。



第2図 調査区位置図



第3図 断面図

3.まとめ

今回の調査地では、1層直下において水成層が存在することを確認した。水成層は生駒山地西麓部を西に流れる扇状地性堆積物で、この内7層は礫を多く含むことから土石流に伴う堆積層である可能性が高い。調査地周辺では、南約100mに位置する水越遺跡第9次調査地(樋口2007)や南西約150mに位置する水越2012-485調査地(坪田・樋口2014)でも同様の水成層を確認していることから、本地は谷地形に位置していた可能性が高くなった。

参考文献

- ・高萩千秋1992「VII 水越遺跡第4次調査(MK91-4)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 財団法人八尾市文化財調査研究会報告34』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋1998「X VIII 水越遺跡第6次調査(MK96-6)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子2001「II 水越遺跡第7次調査(MK2000-7)」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告 2 平成12年度』八尾市教育委員会・財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・樋口 薫2007「V 水越遺跡(第9次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告99』 財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一・米井友美2011「VI 水越遺跡第8次調査(MK2005-8)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告135』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一・樋口 薫2014「I-3-11)水越遺跡(2012-485)の調査』『八尾市内遺跡平成25年度発掘調査報告書 八尾市文化財調査報告72 平成25年度国庫補助事業』八尾市教育委員会



調査地周辺(北から)



調査地周辺(北西から)



3層上面全景(南から)



4層上面全景(南から)



6層上面全景(南から)



北壁0～3層(南から)



北壁3～7層(南から)



北壁10層(南から)

VI 水越遺跡第23次調査(MK2015-23)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市服部川一丁目112番地で実施した高安受水場送水ポンプ棟更新工事に伴う水越遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する水越遺跡第23次調査(MK2015-23)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成27年10月21日(外業実働1日)に、樋口 薫を調査担当者として実施した。調査面積は約16.0m²である。
1. 現地調査においては、岡本武司・塙内洋平の参加を得た。
1. 内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成28年3月31日をもって終了した。
デジタルトレース - 樋口
遺物実測・遺物トレース - 伊藤静江
1. 本書の執筆・編集は樋口が行った。

本　文　目　次

1.はじめに.....	69
2.調査概要.....	70
1) 調査の方法と経過.....	70
2) 基本層序.....	71
3) 検出遺構と出土遺物.....	73
3.まとめ.....	74

VI 水越遺跡第23次調査(MK2015-23)

1. はじめに

大阪府の東部に所在する八尾市は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川によって区画された河内平野の南東部に位置する。今回報告する水越遺跡は、八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では西高安一丁目、水越二・五・七丁目、千塚一～三丁目、服部川一～七丁目、神立一丁目、及び千塚、大窪、山畑、服部川の東西約1.25km、南北約1.2kmがその範囲と推定されている。地形的には、生駒山地西麓部に発達した緩斜状地上（標高12～55m）に立地する。遺跡の西側には、旧大和川の主流であった恩智川や玉串川の氾濫原が拡がっている。

本遺跡は、大正9（1920）年、清原得巣氏によって石鏃が採集されたことに端を発する。その後、昭和5（1930）年には、勾玉研磨用の砥石をはじめ滑石製小玉や管玉の未完成品といった石製品が表採されたほか、昭和9（1934）年には東高野街道（旧国道170号線）の改修工事が行われ、現地表下0.6m付近に堆積する黒褐色を呈した地層から弥生時代後期に帰属する土器が発見された。以上のことから、『高安遺跡』、『千塚遺跡』などの名称で遺跡の存在が古くから知られていた。

昭和53（1978）年、本遺跡内において初となる本格的な調査（府立清友高校新設工事に伴う発掘調査）が大阪府教育委員会により行われ、縄文時代～鎌倉時代の遺構・遺物が検出された。特に弥生時代～古墳時代にかけては、井戸や溝のほか、方形周溝墓や土器棺墓から成る墓域が検出さ



第1図 調査地周辺図

れた。また古墳時代中期については、玉作りに関連する遺跡であったことを示唆する滑石製管玉の未完成品などの石製品が多く出土し、本遺跡の東部に鎮座する式内社玉祖神社との有機的な関係を彷彿させる成果が得られた。

その後、八尾市教育委員会・当調査研究会による試掘調査や数次に亘る本調査が行われ、縄文時代中期～近世に至る複合遺跡として認識されるようになってきた。

本遺跡では、遺跡北部に位置する水越二丁目、千塚二丁目付近(A地域)と、遺跡南部に位置する服部川一～三丁目、山畑付近(B地域)において、多くの調査が行われてきた。この内A地域については、先述した府教委による調査のほか、当研究会による第1～3次調査、市教委による試掘調査が行われており、縄文時代中期～中世にかけての遺構・遺物が確認されている。特に弥生時代中期については、第2次調査で環濠の可能性がある南北溝をはじめ、この溝の西側では竪穴住居や井戸などの遺構群が検出され、付近一帯に当該期の居住域が存在することを明らかにした。一方B地域については、当研究会による第4～9次調査をはじめ、市教委による試掘調査が行われており、水越95-582調査において縄文時代中期末に遡る居住域に関連する遺構・遺物が確認されたほか、第7次調査では晚期後半の土器埋納土坑を検出するなどの成果を得ている。また弥生時代後期後半～末にかけての遺構・遺物が地域全域で多数検出されており、本遺跡の南に隣接する郡川遺跡と連動しながら当該期の集落が形成されている可能性が考えられている。

本遺跡を含む生駒山地西麓部には、多くの遺跡が分布する。北には、弥生時代後期初頭の鋳造鉄剣や古墳時代前期の瑪瑙製鐵形石製品を出土した大竹西遺跡をはじめ、大竹遺跡、太田川遺跡などの縄文時代以降の複合遺跡が展開するほか、古墳時代中期前半に造営された中河内地域最大の前方後円墳である心合寺山古墳(墳丘長160m以上)や中期後半に比定される鏡塚古墳(径約28mの円墳または前方後円墳と推定される)が知られる。東を見ると、生駒山地尾根上には、古墳時代後期以降に築造された高安古墳群(200基以上)が群集している。南には、高安古墳群にさきがけて横穴式石室を採用し、盟主的な役割を担ったことが推測される郡川西塚古墳・東塚古墳が、南北を貫く東高野街道を挟んで東西に対峙している。時代が下ると、本遺跡の南端付近において高麗寺跡(郡川廃寺：奈良時代前期～鎌倉時代)の建立が推測されるが、詳細は分かっていない。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、高安受水場送水ポンプ棟更新工事に伴うもので、当研究会が水越遺跡で実施した第23次調査にあたる。調査区は約4.0×4.0m、面積約16.0m²箇所である。調査は、八尾市教育委員会作成の調査指示書に基づき、現地表(T.P.+12.9m)下3.0m前後までを重機と人力を併用しながら掘削し、平面的な調査を実施、遺構・遺物の検出に努めた。調査で使用した標高は、八尾市街区多角点10D13(調査地北東:T.P.+14.412m)である。

調査の結果、第1面(T.P.+12.3m)で古墳時代初頭～前期の土坑や小穴を、第2面(T.P.+11.9m)で弥生時代中期の溝を検出した。またT.P.+11.7～11.8mとT.P.+11.1～11.2m付近において灰色～暗灰色を呈した土壤化層が存在することを確認した。出土遺物は、弥生土器、古式土師器で、コンテナ(縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m)1箱を数える。



第2図 調査区位置図

2) 基本層序

現地表(T.P.+12.9m)下0.4m前後までは現代の客土・盛土層・擾乱(0層)である。以下現地表下3.0m前後までの2.6m間において13層(1~13層)の基本層序を確認した。1層は旧作土層(T.P.+12.5m)である。部分的に遺存していた。2・3層は作土層(2層:T.P.+12.4~12.5m 3層:T.P.+12.4m)である。4層は土壤化層(T.P.+12.3m)である。調査区の南部に部分的に存在する地層である。本層下面が第1面に相当する。5層は砂礫優勢の水成層(T.P.+12.3m)である。第2面で検出した溝(SD1)の埋土に相当する。ラミナ構造を顕著に認める。6・7層は扇状地性堆積層(6層:T.P.+11.9~12.0m 7層:T.P.+11.8m)である。8層は土壤化層(T.P.+11.7~11.8m)である。9層は扇状地性堆積層(T.P.+11.5~11.6m)である。10層は土壤化層(T.P.+11.1~11.2m)である。11~13層は扇状地性堆積層(11層:T.P.+10.7m 12層:T.P.+10.4m 13層:T.P.+10.1m以下)である。

0層：現代の客土・盛土層・擾乱

1層：暗灰色(5B3/1)粘土質シルト～シルト

調査区南東部にのみ遺存していた旧作土層(T.P.+12.5m)である。層厚は5cm前後を測る。
2層：オリーブ灰色(2.5GY5/1)粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト

作土層(T.P.+12.4~12.5m)である。グライ化が顕著である。層厚は5~15cmを測る。

3層：オリーブ黄色(5Y6/3)粗粒砂～中疊混粘土質シルト～シルト

作土層(T.P.+12.4m)である。若干酸化している地層で、層厚は10~15cmを測る。

4層：黒褐色(7.5YR3/2)細疊～中疊混シルト～中粒砂

調査区の南端部に部分的に遺存していた土壤化層(T.P.+12.3m)である。本層下面が第1面に相当する。

5層：灰黄褐色(10YR6/2)細疊～中疊混中粒砂～極粗粒砂

S D 1の埋土に相当する。上面はT.P.+12.3mを測る。ラミナ構造の発達した砂疊優勢層で、層厚は最深部で120cm前後を測る。本層内から弥生土器(Ⅱ～Ⅲ様式)が出土した。

6層：にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト

扇状地性堆積層(T.P.+11.9~12.0m)である。層厚は12~26cm。本層上面が第2面である。

7層：灰黄褐色(10YR5/2)粘土質シルト～シルト

扇状地性堆積層(T.P.+11.8m)である。層厚は12~18cm。本層上面が第2面である。

8層：灰色(N4/)粗粒砂～細疊混粘土質シルト～シルト

土壤化層(T.P.+11.7~11.8m)である。調査区全域に存在する。層厚は20~30cmを測る。

9層：青灰色(5B5/1)シルト

扇状地性堆積層(T.P.+11.5~11.6m)である。ラミナ構造の発達したグライ化層である。

層厚は20~40cmを測る。

10層：暗灰色(N3/)粗粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土～粘土質シルト

土壤化層(T.P.+11.1~11.2m)である。層厚60cm前後を測る。

11層：灰色(10Y5/1)粗粒砂～細疊混シルト～細粒砂

扇状地性堆積層(T.P.+10.7m)である。層厚は25cm前後を測る。

12層：暗灰色(N3/)粗粒砂～細疊混シルト

扇状地性堆積層(T.P.+10.4m)を測る。層厚は30cm前後を測る。

13層：灰色(N4/)粗粒砂～細疊混シルト～細粒砂

扇状地性堆積層(T.P.+10.1m以下)である。層厚は20cm以上と推測される。

3) 検出遺構と出土遺物

第1面(古墳時初頭～前期)

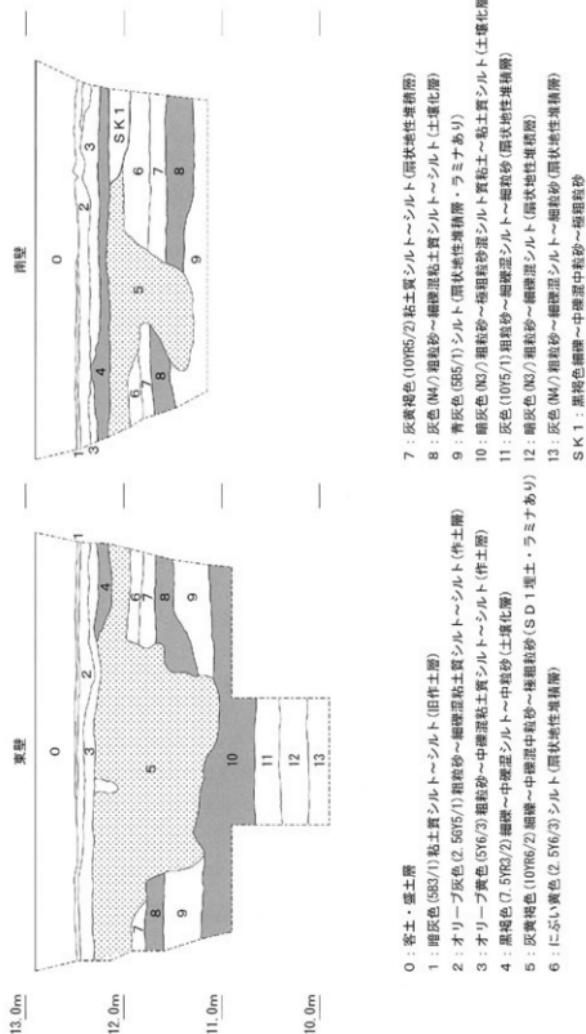
4層土壤化層を除去し、5層上面(T.P.+12.3m前後)を精査、検出した調査面である。古墳時代初頭～前期に比定される土坑を1基(S K 1)、小穴を3個(S P 1～3)検出した。

S K 1

調査区の南西隅で検出した土坑である。西側と南側が調査区外に拡がるため全容は不明であるが、南東～北西主軸の方形土坑の可能性がある。検出規模は、南東～北西長1.75m、南西～北東長1.54mを測る。深さは0.20mで、埋土はブロック土の単層である。古墳時代初頭～前半に比定される古式土器器細片が少量出土した。

S P 1～3

S K 1の埋土を除去したところ、小穴を3個検出した。いずれも平面形状は円形を呈する。検



第3図 断面図 (S = 1 / 50)

出規模は、S P 1 が径0.20m S P 2 が径0.28m、S P 3 が径0.18mを測る。深さはいずれも0.10m前後と浅い。埋土はブロック土の単層で、出土遺物はなし。柱の痕跡等は認められなかった。

第2面(弥生時代中期)

5層を除去中、6・7層上面(T.P.+11.9~12.0m前後)を精査、検出した調査面である。調査区東部において溝を1条(S D 1)検出した。

S D 1

調査区東部を北東-南西方向に直線的に延びる溝である。検出規模は、幅1.40m、長さ4.46mを測る。検出部分の深さは0.90m前後であるが、東壁では最深で1.26mを測る。埋土は基本層序の5層が相当する。砂礫優勢のラミナ構造の発達した埋土で、上流からの流れ込みと考えられる弥生土器が出土した。この内2点(1・2)を図化した。1は壺の口縁端部から肩部の細片である。口縁部は外反しながら上外方に短く伸びるほか、端部は丸く終息させる個体である。体部外面には継縫ミガキを施す。口径は22.6cmを測る。2は壺の体部下位から底部の細片である。底面は平底を成す。調整は磨滅のため不明である。これらの遺物の帰属時期は弥生時代中期(Ⅱ~Ⅲ様式)に比定される。

3. まとめ

調査の結果、T.P.+12.3m前後で古墳時代初頭~前期に比定される遺構を、T.P.+11.9~12.0m前後で弥生時代中期に比定される遺構をそれぞれ検出した。この内古墳時代初頭~前期については、S K 1 が平面方形の土坑の可能性があるほか、これに付随する小穴を3基検出したことから、竪穴住居の可能性も考えられよう。本地の北西では第5次調査が、南西では郡川遺跡第3次調査が行われ、それぞれ弥生時代後期から古墳時代前期の居住域や墓域に関連する遺構群が多数検出された。特に第5次調査では庄内式期新相に比定される竪穴住居が2棟検出されており、今回検出されたS K 1 がこれらの居住域の東への拡がりを示唆する成果として特筆される。

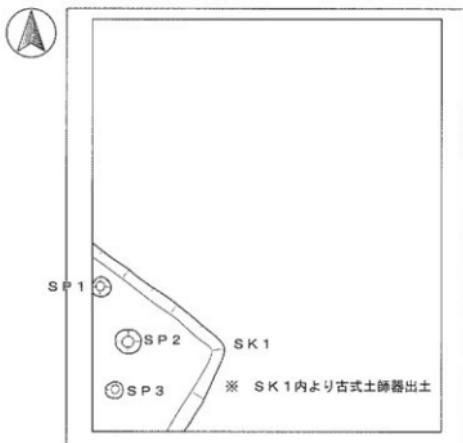
一方、T.P.+11.9~12.0m前後で検出したS D 1について、出土遺物から弥生時代中期(Ⅱ~Ⅲ様式)に帰属する溝の可能性が高い。当該期の遺構群は周辺では確認されておらず、今回の成果によって、本地周辺から東方において当該期の遺構群が展開している可能性が高くなつた。

また、形成時期は不明であるが、T.P.+11.7~11.8mに存在する8層や、T.P.+11.1~11.2mに存在する10層は、土壤化が顕著な地層であり、これらの地層の上面は生活面として機能している可能性が高く、弥生時代前期以前の遺構の存在にも注意する必要があろう。

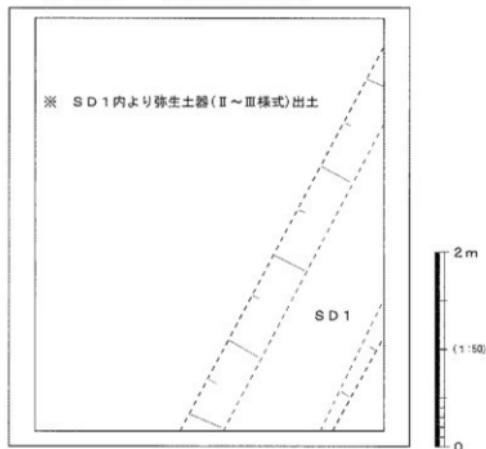
参考文献

- ・原田 修・久貝 健・島田和子1976「清原得巣所蔵考古資料図録-高安の遺跡と遺物-」『大阪文化誌季刊第2巻・2号・通巻第6号』
- ・大阪府教育委員会1978「府立清友高等学校新築工事に伴う発掘調査現地説明会資料」
- ・吉岡 哲1988「河内の玉作遺跡-本校敷地周辺の遺跡とその性格-」『紀要「清友」第1号』大阪府立清友高等学校
- ・坪田真一2006「I 郡川遺跡(第3次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告92』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一2006「II 水越遺跡(第5次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告92』(財)八尾市文化財調査研究会

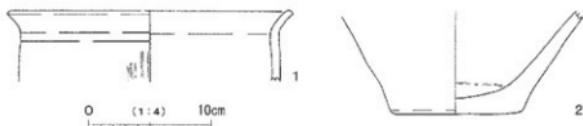
4層下面検出 SK 1 平面図



6・7層上面検出 SD 1 平面図(断面図より復元)



第4図 平面図



第5図 SD 1 出土遺物実測図



調査区周辺状況(北から)



調査区掘削前状況(南西から)



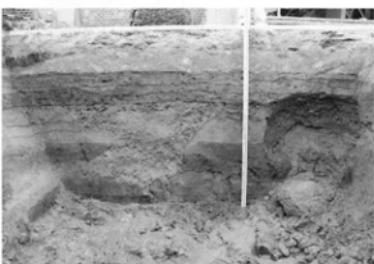
4 潜下面全景(西から)



SK 1(北西から)



東壁(西から)



南壁(北から)



東壁・南壁(北西から)



東壁下層堆積状況(西から)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	おんちいせき	かめいいせき	たけぶらいせき	みずこしいせき				
書名	恩智遺跡	亀井遺跡	竹洞遺跡	水越遺跡				
副書名								
シリーズ名	公益財團法人八尾市文化財調査研究会報告							
シリーズ番号	150							
編著者名	I坪田真一、Ⅲ~V西村公勤(編)、Ⅱ・VI樋口 真							
編集機関	公益財團法人八尾市文化財調査研究会							
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700							
発行年月日	西暦2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査 原因	
おんちいせき 恩智遺跡 (第24・29次調査)	おおさかみやおんじのむらかまちうらようめ 大阪府八尾市恩智中町3丁目	27212	30	34度 36分 28秒	135度 37分 39秒	20120213~ 20120225· 20121213~ 20130130	約16.5· 約92.0	記録保存調査
かめいいせき 亀井遺跡 (第19次調査)	おおさかみやおんじのむらかまちうらようめ 大阪府八尾市亀井町1丁目	27212	26	34度 36分 59秒	135度 34分 46秒	20150514~ 20150515	約25.0	記録保存調査
たけぶらいせき 竹洞遺跡 (第11次調査)	おおさかみやおたけくぼちうらようめ 大阪府八尾市竹洞東4丁目	27212	61	34度 37分 01秒	135度 34分 14秒	20151225	約9.0	記録保存調査
みずこしいせき 水越遺跡 (第19次調査)	おおさかみやみずこしきうらようめ 大阪府八尾市千塚2丁目	27212	42	34度 38分 02秒	135度 38分 17秒	20150414~ 20150421	約58.0	記録保存調査
みずこしいせき 水越遺跡 (第22次調査)	おおさかみやみずこしきうらようめ 大阪府八尾市大庄~ 服部川1丁目	27212	42	34度 37分 41秒	135度 38分 07秒	20151015~ 20151120	約48.0	記録保存調査
みずこしいせき 水越遺跡 (第23次調査)	おおさかみやみずこしきうらようめ 大阪府八尾市服部川1丁目	27212	42	34度 37分 30秒	135度 38分 01秒	20151021	約16.0	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物		特記事項		
恩智遺跡 (第24・29次調査)	集落	弥生時代前期末		弥生土器壺				
		弥生時代中期後半	土坑	弥生土器壺・甕・鉢・高杯・水差形土器				
		弥生時代後期初頭		弥生土器壺・甕・高杯				
	平安時代	土坑		黒色土器壺				
亀井遺跡 (第19次調査)	集落							
竹洞遺跡 (第11次調査)	集落	古墳時代後期	小穴溝					
水越遺跡 (第19次調査)	集落	弥生時代前期末	土坑	弥生時代土器壺				
		弥生時代中期		サヌカイト製打製石鏃				
		古墳時代前期		古式土師器				
		古墳時代中~後期	溝	土師器窓杯				
	中世	土坑		土師器羽釜				
水越遺跡 (第22次調査)	集落	近世	小穴	磁器碗				
水越遺跡 (第23次調査)	集落	弥生時代中期	溝	弥生土器壺				
		古墳時代初頭~前期	土坑 小穴					

公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告150

- I 恩智遺跡(第24・29次調査)
- II 龜井遺跡(第19次調査)
- III 竹瀬遺跡(第11次調査)
- IV 水越遺跡(第19次調査)
- V 水越遺跡(第22次調査)
- VI 水越遺跡(第23次調査)

発行 平成28年3月
編集 公益財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2
TEL・FAX 072-994-4700

印刷 (株)近畿印刷センター
表紙 レザック66 <260Kg>
本文 マットコート <70Kg>
国版 マットコート <70Kg>